新柔佛國
黎度海

特 18
736



新案實用

# 愛多喜教海下

一名 新撰俗諦布教指南

椰陰小泉了諦和上述　鞠山僧海筆記

## （四十）

### 新年の教會

「元日や夕の鬼が禮に來た」とは古來云ひ傳ふることにて俚謠が短句か知られぬこと。鬼にも角にも世間に於て大年又は大晦日と稱し三百六十五日の終りの日に貸付金の催促や品物代の督責を爲しつゝ奔走するものを指して鬼と呼び來れり。其鬼と呼ばれたる身が一夜明けて元日となれば御目出度御座りますと。破顔微笑の挨拶は昨夜の呵責に似もやらぬといふ實態を云ひ顯したものに相違ありませぬ。是に依て鬼も一轉して佛となる事を承知なさるゝが宜し「元日や後に近き大晦日」とは是も古人の口より出でたるものにて。平生を油

明治 39 6 23
交内

斷して暮す者に對する警語と存じます。元日は一年の頭日なれば大年大晦日を前に見る時は三百六十五日の長日月ある故。自然と物事に油斷を爲し易し油斷積りて終に大晦日を眼前に切迫し「急に來た樣に思ふよ年の暮」といふ句の如く當惑を致す事なれども。元日に後を顧れば近き事背後一日を餘さず。此背後にある大晦日を常に忘れずんば物事に油斷はありませぬ。一日〳〵油斷なく出精して各自勉强すれば債鬼の呵責を受る恐れはあるまじと云ふ意味なり。此に一奇話あり。甲生問て云く古來晦日蕎麥と稱し大晦日には勿論月々三十日三十一日に蕎麥を喰ふ風習行はれ日本第一の都府たる東京市に最も多きを見る是何の因由ありて。然るやと乙生答て云く人こして世帶の縮まるを厭ひ財産の伸るを忻ばざるはなし。蕎麥は打置くに伸るものなり。是に依て延喜を祝ふがため蕎麥を喰ふなりと丙生





進んで云く其說甚だ聞へざるなり何とならば蕎麥は打置ひて伸るものにあらず。却てきるゝものなり。豈此物を以て世帶を伸す延喜に用ゐべけんや。是は別に因由あり。往昔商家の手代某大晦日の夜に貸金請求の爲所々奔走せしが。鬱氣胸中に充滿し頻に死を欲するの情を增し抑止し難ければ集金を主人に渡し。速に其情を遂んと夜半後一と先主家に歸りたれば。主人は夜中奔走の勞を慰め汝定て寒からん今方に蕎麥を溫めたり。早く之を食すべしと。勸むれども。手代は殘餘の金を取集んと云ふに托して疾く死に就かんと思ふものから堅く之を辭し去らんとす。然るに主人の厚意拒み難く一抔の蕎麥を食し了りて直に飛出し此樹に縊首せんと豫定し置きたる處に至りぬれば。既に一人の縊死者ありて。下り居れり一目吃驚頓に死を嫌ふの念生じ急に歸りて意中を主人に語り共に無事を喜びたりといふ。

若し主人の厚意に依て蕎麥を食する事なくんば死を免がるべからず蕎麥の爲に時間を移し時間を移したる爲に第一の縊首者に樹木を奪はる如是の因由ありて。晦日に蕎麥を食するなりと口に泡を吐きつゝ意得顔に喋々語りける。傍に一老翁あり甲乙丙の三生に對し徐に口を開ひて云く何れも未だ十分の意を盡さず。萬人の耳を傾くる說にあらず。此に一の考案あり其は如何といふに晦日蕎麥は人をして平生に油斷を爲さしめざるの警戒ならん蕎麥と傍と國音相通すれば晦日蕎麥を記臆して晦日の遠からざるをしらせ常に晦日傍なり。油斷すべからずと元日より此心得にてあるならば自然と家業家職を勉强するの念に怠らず日夜を徒消する事少なければ利益を收得する事多きは道理の至極なり。身の分限に應じて財囊に餘裕あれは大年と聞くも大晦日と知るも敢て怖るゝに足らず債鬼に呵責を受る憂れあ





りませぬ。かくの如く人を安樂に導んとて大年大晦日は遠きにあらず。近きもの傍にありといふ事を記臆させる爲傍と國音相通の蕎麥を大年大晦日に喰ふ事になりしが。今猶月々三十日三十一日にも之を用ゐるに至りしものなるべしと。流石に老翁は龜の甲ならぬ年の功に由て出す所の考案大に面白し萬人の耳を傾け能ふや否は豫知し難けれども。萬年の末に此說を傳ふるも敢て差支へはなかるべし總て事は何に寄するとも他人に向て故障とならず。自已の家業家職を勉勵して富國の基を强固にする事ならば。遠慮なく行ふが宜しけれども。年越が來た豆を煎れよ上下を着るべし。時刻に逼りた福は內鬼は外〳〵と四隣を憚らず大聲を發して他人の安眠を妨害し識者の苦笑を博取する樣の兒戲は遠慮なく。廢止したき事なり豆は蒔散らさずとも福は內鬼は外と呼ばずとも。一家和合して勉强すれば稼ぐ

に追付く貧乏なし。隨て財囊に不足を感ぜざれば顔に八の字を作る世話もなし。笑ふ門には福來るといふにあらずや。蒔散して捨る豆あらば煎りて小兒に與ふべし。忽ち笑ふて福を招くは必定であります。

我胸の外に鬼なし年の暮ごは夢の世に夢見つゝ大に感じたる事ありて予が昏て口占たる寐言なり。債主を呼んで鬼といふは何故ぞとよく〳〵考へて見たまへ債主は決して鬼にあらず。借人を救ひし佛なり借人を助けし神なり神や佛に比すべき債主を鬼と呼來たるは督責に苦痛を感ずるに依てならん。若し貧債者に於て救はれ助けられた る恩を忘れず。返濟の期限に約定を違へずんば苦痛を感ずる督責に遇ふ事はありませぬ。然れば督責は債主の促すに非ずして借人より招くもの苦痛は借人の感ずる所にして債主の與へたるに非ず。鬼は



外より來らず。我胸にあり鬼を嫌はゞ勉强すべし勉强すれば鬼は轉じて佛となるべし。勉强すればとて儉約せざれば底のなき桶に水を盛る如くにて更に益なし儉約すればとて他人に對して爲す事を惜めば吝嗇に陷り人道を闕くに致る其他一方に偏して益なき事の數多ければ平生用心の杖に充つべきもの二三を拾ひて供へんに先火の用心と非の用心を第一に堪忍を他人にさせず。自身に爲す事行儀は堅くして言語は柔かにすべし。上たる人を敬ひ下たる者を隣む事恩を受たる事は忘るべからず。恩を與へたる事は忘るべし。佛法を心に收めて王法を形に守るべし。病起る時は醫藥によるべし。神佛によるべからず。國が開化しても富優になりしと氣樂に思ふべからず。開化するに隨て財寶に不足を感ずるものと心得べし滊車滊船の便利に油斷をなす勿れこれほど速に奔走せざれば回れぬ世の中の手本と

見よ内地雜居は恐るゝに足らじ。内地人民の無智無德に恐るゝなり日本の人民は日本を忘るべからず。日本の爲に我身を忘れぬばならぬ我身を忘るゝことは放逸に流れよといふに非ず私心を離れて國家に盡すべきを云ふ國と民とは別物ならず。民の國なり國の民なり人民にして私心の强きは國家の弱きを祈るに當る國家の弱きは人民の不幸なれば勉めて私を離るべし。

私を離れてみれば心ほど
たふとき寶世になかりけり

議論を止めて實際私心を離れてみたまへ方寸に廣大無邊の餘地ありて森羅萬象を容るゝも敢て差支なく褒られて飛立つ喜びもなき代りに罵られて怒眼を大にする骨折もなし。よく〳〵考へて見たまへ褒らるゝ價値の眞にありて褒らるゝものこせば其は當然の事なり。何



ぞ喜ぶに足らん罵らるゝ過失の實にありて。罵らるゝものこせば其は當然の事なり。何ぞ怒ることを爲さん褒むへき價値なきに褒られたりこせば。見込み違こして置くべし。罵らるべき過失なきに罵られたりこせば罵る人の心を笑ふべきのみ褒るも罵るも我に關らざれば痛くもなし痒くもなし。

罵るも褒むるも我にあづからず
打つも撫づるも石は石なり

褒られて玉ともならずそしられて
輕くもならず石は石なり

斯く心廣く且安ければ物事に苦みなし。口にいふ事身に行ふ事道に外れざれば自由自在を得て極樂の果報を取越したるかこ。怪む程の幸福涌き來る故年越に豆蒔ひて追出すべき鬼も近所近邊に居らざれ

は福は内鬼は外と兒戯を眞似る世話も入らず蕎麥好きな人は何時にても喰ふが宜し嫌ひな人は大晦日にても喰はぬが宜し晦日蕎麥の因緣講釋が出來ざるとも。世間の交際に差支なければ心配なし勉强して借金をなさゞれば夕の鬼が禮に來たといふ元日に遇ふ氣遣ひもなし品物を購ふて代金を渡し置く時は元日の背後に大晦日を負ふとも心に痛みを生ずる事なし。斯樣に心廣く安樂なる一日を積みて一ケ月となし一ケ月を積みて一ケ年となし。年々歲々安樂を積みて一生を終るまで樂より樂に入るこそ萬物の靈たる人間に生れたる甲斐あれ。

勉强の大福は内放蕩の
鬼外にして年越をせよ

法の園法の花咲く法の春

風も薰れり雨も薰れり
煎豆に花咲く法の春は來て
鬼も佛となれる世の中

佛とも鬼ともなれる心かな
自由自在の人の身の上

何れともなれるが自由自在なら
鬼とならずに佛とはなれ

親も子も孫もろともに和合海
波靜かなるのりの大御代

かくまでも貴き御代に生る身の
なごか賤しき名を殘すべき

元日に目出度口の開き初

其聲高し無量壽如來
無量壽と目出度聲のする内に
集まるものは功德寶財
もろ〳〵の功德寶財もろ〳〵の
民うるほして光こそませ

新年教會

（四十一）一休の影法師

肉氣なきこの髑髏あなかしこ
目出たくかしくこれまりはなし

此一首は古德一休禪師が元旦に讀まれたる歌にして。人口に膾炙し誰知らぬものなきが如し。然れども文句を知るのみにて意義を感得致さねば誰知る者なしと申さねばなりませぬ。一日信徒某繪絹を携へ來り余に請ふて云く新年用になる樣。目出度ものを書きたまへと余は此に於て一休禪師の古を思ひ出したるまゝ禿筆を硯海に注ぎ一個の髑髏を寫しぬるに某は一目して喫驚の聲を發し。いや夫はと開きし口をも閉兼る有樣にて失望の色は滿面に溢れたり。是卽ち肉氣なき髑髏の形質のみを知りて未だ其意義を知らざればなり。余は可笑しくもあり。亦氣の毒にもありければ更に筆を取り直し右の一休の歌に左の蜂腰を添へて髑髏の題とはなしぬ。

これを見よ目出たる穴のあるのみで
貪欲もなく怒り氣もなし
目出たしといのりつゝ猶このすがた
きらふは何と迷ひならずや
かくなれる姿と知らは假りの宿
雨降らばふれ風吹かばふけ

新玉の年たちけりといはふ哉
わが身につもる老をわすれて
極樂はひとゝせちかくなりにけり
あはれ嬉しき朝ぼらけ哉
雨風はそのまゝにしてあめかぜに
障らぬ樣の用心をせよ
御用心なされ未來の一大事
かゝる姿となりはてぬまに
行く先きを彌陀に任せてなるまゝに
なれば氣やすしかゝる姿も
みほとけにまかせて安しわが後生
無量壽佛の國ときゝつゝ





無量壽ときけば目出たし限りある
鶴龜さへも祝ふ世の中
何よりもめでたきはこの舍利かうべ
無量壽佛をとなへさすれば

書きつゝ讀み讀みつゝ書き書き了りて筆を投するとき某は溜息をつきて云ふ樣いかにも目出たきものは是ならんと。失望の色を轉して歡喜の相を滿面にあらはす故。余も徐々と今昔の感を述て語を交ふるに至れり。御覽なされこの髏髑は衣服を飾り度と云ふ欲望もなく美食を喰ひ度と云ふ貪欲もなく。名譽を揚げ度と云ふ名欲もなく歐打しても罵詈しても。瞋恚を起すと云ふこともなし。只是有るものは目の出拔けたる穴のみ此穴甚だ大なれば前後を見拔くに最も力ありて斯く貪欲も瞋恚し起して益なきを看破せるならん。されば目

出たる髑髏は非凡。

程もなくおくれさきだつ露の身と
しらでや結ぶ契なるらん

みほとけをおなじ心にたのむこそ
千代の妹背の契なるらん

非俗のものなり。不吉不祥を脱したりと申すべし。世に目出たし〳〵と祈るも此髑髏の如く。目出たしと云ふ事ならん歟と思はるゝなり。然るに目出たしと祈りながら目出たる髑髏の畫圖を見ても身の毛彌竪程に嫌ふとは前後牟盾に非ざるや。能く〳〵考へて見たまへいかほど嫌ふても嫌ふたる爲に此姿になる事を辭退は出來ませぬ辭退の出來ぬ事を知りてみれば愛するまでには及ばずとも。嫌ふ心は消亡致します故。髑髏を見て目出たしと申して差支はありませぬ



到底斯くの如くの姿になるべき身の進退去就は夢の如く。幻の如し夢や幻の其中に暫時の宿を結ぶものなりとすれば。一生の間風雨に逢ふとも暑寒に向ふとも。風は吹く筈のもの雨は降る筈のもの夏は暑き筈のもの冬は寒き筈のもの婆婆は思ふまゝにならぬ。筈のものとして。總ての事に堪忍し易し堪忍すれば小言云ふ事はありませぬ小言なきは大樂なりさりながら吹く風に對しても降る雨に對しても暑さ寒さに對しても夢幻の間を過す身の障りにならぬまでの用心は十分なさねばなりませぬ。夢幻の間の用心さへ十分なさねばならぬものとしてみれば後生の一大事の御用心は勿論の事であります。夢幻の間を過す身の用心を爲しては妨碍になる。宗旨なれば今日の世に修し能ふ事叶はざれども。世と共に連立つて進める眞宗に遇ふ身ならば時期。

魚のから前につらねてをのが身の
千代萬代を祝ふ愚かさ
海川のいろくづまでも後の世に
たちかへりてぞすくひつくさん

を外さぬ樣。急ぎて信奉せねばなりませぬ。同じ人間に生れても生れ場所によては佛教の名を聞く事すら叶ひませぬ。印度は釋迦佛陀の御出世なされたる國なれども。國勢の衰退して他の版圖に屬し亡國の民と呼ばるゝのみならず。佛教の元氣亦地の四方に散し僅に存在せるもの〻小乘にて自調自度の教なれば大乘の光輝は影も殘らす實に憫むべき現狀なり。我日本は欽明天皇の御宇佛教渡來し上王侯大臣より下野士賤民に至るまで大乘佛教の光澤を被り。大乘相應の地と云はれ今日にては歐米人の口にも大乘佛教をして日本佛教と呼





ばしむるに至れり其大乘佛教の中に於て宗祖大師は聖淨二門頓漸二教横竪二超等の御判釋ありますれども。結歸する所生涯生死の凡夫にて生涯生死の果を牽かず煩惱菩提體無二とすみやかにとくさとらしむるは。一念歸命の信心決定する時攝取したまふ。本願圓頓一乘の彌陀法のみとのたまふにあり。一念歸命の信心とは凡夫性得の有の儘罪業の深重にこゝろをかけず。無善の凡夫を遠慮せずたゞ阿彌陀佛の本願力を疑ひなく。信ずるばかりなり。死ぬこと嫌ひの凡夫にても死ねば御淨土彼國は無量壽なりときゝつれば。髑髏見る我眼は昔と今と差別なけれども。嫌ふ心のいつか轉じて愛する心になるは必定であります。愛する心になればとて髑髏が鶴龜に見るには非ず。鶴龜は鶴龜として愛し髑髏は髑髏として嫌はぬ所が最も妙であります。若し信心決定の身となれば死を好んで生を嫌ひ

髑髏は鶴龜に見ゆるものなりごあらば。甚だ難儀千萬迷惑至極の佛法ご申さねばなりませぬ。古德の歌にもある如く。

佛法はありのまゝこそたふとけれ
柳はみどり花はくれなゐ

花を花ご見るに造作なし柳を柳ご見るに分別入らず。凡夫は凡夫なり佛陀は佛陀なり。有のまゝこそたふとけれ信心決定すればとて三毒五欲の實機は替りませぬ。替らねばこそ我機をすてゝ彌陀をたのめ我機をすてゝこそ煩惱具足ご信知して本願力に乘じたるなれ我等穢身をすてゝ法性常樂を證するは。此土にあらずして。彼土に至る上の事なれば證せしむる佛恩を仰ぎて穢身のまゝ稱名念佛すべし念佛する口は光明を放つが如しご讃嘆は受つゝも穢身のまゝなれば鶴龜を髑髏ご見る眼もなく。髑髏を鶴龜ご見る眼もなし。有の儘にて之を見れども。愛憎の念を別にせし愚かさは亡失せり依之鶴龜を見るに就ても我等は長壽を願ふこゝろより千年の高壽を保つご云ふ鶴を慕ひながら萬年の長齡を持つご云ふ龜を愛しながら。無量壽ごある。南無阿彌陀佛を延壽よからぬ樣に思ひし事の昔を耻かしやご愈々佛恩報謝の稱名相續に御緣を厚ふし髑髏を見るに就ても我等は死亡するを嫌ふこゝろより髑髏の畫圖さへ眼に觸るゝを厭ひながら不老不死の妙法を得て無量壽の妙軀ごなることを聽聞せざりしこの昔を耻かしやご益々佛恩報謝の稱名相續に御緣を强ふするの仕合せを蒙むる事になります。斯く髑髏を見るに就て目出たき事の此上なき無量壽の南無阿彌陀佛を稱ふる御緣を厚ふし强ふするこせば。髑髏ほご目出たきものはなしご申すも云ひ過ぎではありますまひ。髑髏〳〵眞に潔髑髏笑ひもせず怒りもせず。風に吹かれ雨に濡らさ

れ日を送り夜を明し暑氣にも堪へ寒氣にも恐び世の外のものにありながら。世の人に知られ世の人に弄びされながら。世の塵に汚れずいつも清淨潔白なる無貪無欲無瞋無痴有るものは只目出たる穴のみ世に穴なき人と云はれんには此髑髏の如き心して目出たしと云ふには如かず呵々。

（四十二）　彼岸會の教會

問云彼岸と申すは氣候の名目でありますか。答云春秋兩度必ず定まりてある日柄なれば氣候にも通じますれども一周間宛諸寺諸山に佛事を營み法會を開く彼岸なる故に佛法上の名目と心得たが至當でありませふ。問云何㊀へ年々春秋兩度の時節を定めて佛事を營み法會を開く定例としましたのか。答云彼岸の中日卽皇靈祭の當日は春秋共時に於て晝夜均等の節にして尙寒からす暑からす佛道修行の好時節であります。問云時に於て晝夜均等の節なれは佛道修行に適するといふ所由を聞かせて下され。答觀法なとを修するには此節最も適當にして日想觀の如き正東の日の出西正の日の入を要します㊁へ。晝夜均等の時節に限ると申して宜しきなり。問云今日に於て其樣の觀法を修行する人がありますか。答云觀法修行の人の有無は敢て穿鑿したことなけれとも。凡眼の通する所には無き樣てあります。問云觀法修行の人ありたる古へは彼岸の好時節も必要でありましたらふか。觀法修行の人の絶てなき今日に在て彼岸〳〵と騷き立るは徒ら事てありませぬか。答云根機拙き今日には觀法修行の人はなきにもせよ。此好時節に會法を開き佛緣を結び精神界に光明を放つの道を開導すること決して徒ら事てありませぬ。問云樹木の植換や接木するは彼岸最も適當なりと申す事を豫て耳にして居ります。好時節

なりと申す言の中に是等の事も含みて居るのてす歟。答云含みて居ると申しても敢て差支はありませぬけれと。前に好時節なりと申したは佛法に就ての事てあります。問云佛法に就て好時節なりといふ御話は日想觀なとを修行ずる上に取ての事と承はりました。然れとも今の世に於て凡眼の通する所其樣なる觀法者なきとの御見込なれは佛法に就て好時節の必要なき樣に思はれますいかゞてあります歟答云晝夜均等にして且不寒不熱なる時節は聞法に至極適當なれは。此時期甚だ必要であります。問云其所由委く述て下さらぬ歟。答云此所に一老人ありて聞法の志望あるものと假定なされ。老人は强寒に敵する力はありますまひ。たとひ懷爐や溫石に暖を求め被服や帽子に寒を防ぐとも身體重く足許危く到底遠路の叶はぬのみならず。四五町許の近きも意の如くならぬは必定であります。又炎天には懷爐溫石の世話はなけれとも。寒氣に堪へ難きたけ夫だけ暑氣にも恐ひ難きは老身の常態なる故聞法の志望ありながら。寒暑共絶望せねばなりませぬ。春秋彼岸の氣候は世諺にも暑さ寒さも彼岸までと申しまして冬以來寒氣の居りしも春の彼岸に入れば懷爐や溫石に遑まやる樣になりますから。老人の身に自由を得られます。熱氣强かりし夏は去りたれど殘暑は來た退かずといひながらも。秋の彼岸に入れば扇子や汗拭を忘れても困らぬ樣になりますから。老人の身は動き易くあります。依之五町や十町の道を歩むを厭はぬのみならず。愛する孫の手を引て出れば半里や壹里弱は心配なしに參詣して聞法の志望を遂ぐる事が出來ますもの聞法に適當至極の好時節は彼岸と申さねばなりませぬ。問云春に彼岸櫻あり秋に彼岸花あり。草木に彼岸の名を呼ぶは何故であります歟。答云草木に彼岸の名の附たる

は彼岸の時節に咲く故でありませふ。問云彼岸の時節に咲く花は一種や二種ではありますまひに。彼岸櫻彼岸花と草も木も一種宛に限られて呼び來りたには別段所由ありませぬ歟。答云花に種類はありても佛前に供するに便なきものは緣少なくして佛前に供するに便あるものは緣多き道理なれば彼岸の時節に咲く花の種類多き中に彼岸櫻と呼ばれ彼岸花と名けらるゝものは他の花より佛前に供するに便ありて緣多かりしに由るのでありませふ。問云彼岸と申すは佛法上の名目と心得たか至當なりとまでは承りましたれど。未だ其意を十分に領得せず。委くお知せ下さらぬ歟。答云彼岸とは此岸に對する言でありまして此岸とは生死の此岸なゝと申しまして迷界を指します。彼岸とは涅槃の彼岸なゝと熟しまして悟界を指すのであります問云涅槃の彼岸と熟して悟界を指す由來を述て下され答云佛法修行



の名目に六波羅密と申す事がありまして。六波羅密とは一に布施波羅密二に持戒波羅密三に忍辱波羅密四に精進波羅密五に禪定波羅密六に智惠波羅密であります。渡羅密は梵語にして支那譯に到彼岸といへり迷界の者が生死の此岸より悟界卽涅槃の彼岸に到達する修行が布施等の六波羅密なる故之を六度の行とも申します。是等の由來によて悟界を名けて彼岸と申します。問云されば彼岸の一周間は六波羅密の修行をするが名實相應でありますか歟。答云日想觀適當の好時節は古今に變更なけれども。觀法者は古にありて今に無が如く六波羅密の修行も名は古今に通ずれども。實に行ふ人は今世に無ひのでありますから。彼岸の名に相應する實を擧んことなどは及ばぬことを企望するよりは聞法の益を得て眞の佛教信者となるが肝要であります。問云彼岸の間は惡事を愼めと古來世上に傳へまするが。

是等も相當する言であります歟。答云惡事を愼むを彼岸の間と限らば彼岸の前後に於ては惡事をつゝしまずとも。苦しからぬ樣に聞にますから相當の語と思はれませぬ。問云古人とて無意味に傳へたのではありますまひ。いかゞてせふ答云惡事を愼むは彼岸に限らねとも。殊に佛法有緣の日拵なれば徒らに過す勿れといふ意より限りたる言語が傳はりたのでありませふ問云彼岸に惡事を愼めは平生より功德が勝るといふ意味なる歟。答云彼岸の出來事は平生に勝るといふ事なきは勿論平生にせよ。彼岸にせよ功德を積むために惡事を愼むといふは大間違の事であります。問云惡事を愼みて功德になりませぬ歟。答云惡事を愼むといふのみでは善事を爲さずに功德とならぬは必定の事たとひ惡事を愼むと共に善事をなして功德となるにもせよ。我宗祖大師の御教示に於ては功德を目的に務むる樣の心得ありてはなりませぬ。問云然らばいかゞ心得べきや。答云平生に佛法有緣の人は彼岸に向て名目の慕はしきよりして一層末來の果報を思ひ浮べつゝ信心堅固に報謝の大行と共に言行に就て謹愼するが宜し又平生に佛法疎遠の人は彼岸に向て名目の慕はしきに急き求法の念を發し信心決定の上報謝の大行を務め言行に就て謹愼するが宜し。問云善人に近付惡人に遠ざかれとの御教化は善を求め惡を怖る爲の故でありませぬか。答云善を求め惡を怖るといはゞ功德を目的とするに聞ゑれども。信心念佛の行者は進退居動の總てが佛法に關係する故善惡の友を擇ばねばならぬといふ。掟の御沙汰であります。善を求め惡を怖れて其功德をもて來世の資本にせよとの御教化でありませぬ。問云金剛の信心決定の身なれば交はる友によて變心はありますまひ。いかゝ答云決定心によて變動はなくとも俗に所謂朱に交

れば赤くなるやら言行に善惡の色が移らぬことは申し難し儒典にも君子は危きに近寄らずとあれば信教信者も注意せよといふ程の御教化が掟の御言であります。兎に角も彼岸は涅槃の彼岸に到達する船に乘るべき好時節であります。「たゞのせてもらふひがんの渡し哉」と古人の句あり他力のこゝろを讀みあらはしたものと思ひます。實に乘るべきは他力の船なり和讃に生死の苦海ホトリナシヒサシクシツメルワレラヲハ彌陀弘誓ノ船ノミソノセテ必ス渡シケルトの給へり

（四十三）　盆會の教會

盆會とは略稱にして委くは盂蘭盆會と申すべきである。盂蘭盆會とは盂蘭會は梵語であります。之を支那譯にして云ときは救倒懸こなります。倒懸は譬喩である。倒懸は字の如く倒まに懸るのであるから苦しき事は申すまでもなひ事である。餓鬼に墮在する身は飢渴の





苦を受る恰も倒懸の如く。之を救ふを盂蘭盆と稱するのである。斯樣に申したるのみにては分りますまひから。盂蘭盆の起原を略述いたしませふ。其は釋迦如來の御在世御弟子の中に目蓮尊者といふかありました。此尊者は阿羅漢を悟りた聖者でありました故過きし古も未だ來らざる事も前後を知る事か出來るものから。自身の父母は過去りて今は何處にあるやと心眼を以て上は天上より下は地獄まで御覽に成りたれは。父上は善所に生して快樂を受て居らるゝけれども。母上は餓鬼に墮て苦患を受て居らるる事か明かに知れた。乃て目蓮尊者は母上の飢渴に苦みたまふ實狀を見て大に悲み鐵鉢に熟飯を盛り直に往て母上に與へたまひた。母上は歡大喜地の思ひ飛ふか如くに鉢を受け食せんとせらるゝと忽然飯は炎と成りて燃上り食する事を得す。尊者は業報の免かれ難き如是乎と悲泣しつゝ。祇園

精舍に還り釋迦如來に此事を申し上。且救濟の法を求められました。のである。

釋迦如來は此時いかなる救濟法を說きたまひしかといふに。目連尊者の母一人の爲めとのたまはず。汝か母を救ひ一切衆生の惡道に在るものを救はんかために。山海の美味を準備して十方の衆僧を招請すへし。諸大衆を供養すれは汝か母及一切衆生の苦にあるもの其功德によりて未來必す三塗を脫れて樂所に生せんと。依之目連尊者は釋迦如來の命令に順ひ實行せられたといふか盂蘭盆會の起原であります。

目連尊者の母上は餓鬼道に墮在して居たれとも。我子のために餓鬼の苦患を脫れて天上界に生れる事か出來ました。今の世に目連尊者の樣なる子を持た親かありませふ歟。似た子もなひと申さる〳〵親達ばかりてあらふと思ふ。然れば死後の追善は憑むべからすといふ事明了でありませふ。苟くも死後の追善たのむへからずと知らは後生の一大事を今生に決着して置かねはならぬといふ氣か付きませふ。後生大事と氣は付きまして自身に決著の出來るものは今の世に少なからふ。否無からふと思ふ。蓮如上人かたのむべきは彌陀如來なり。信心決定してまいるへきは安養の淨土なりと仰せられてありて昧き凡夫の胸算用を止め明るき如來の御計ひに任せ。未來は淨土へ往生させて頂く事を深く信したてまつり。稱名念佛相續する外に道はなからふと思ふ。

盆會に精靈棚を造り種々の物品を供へ之を精靈祭とも稱するは。今の世の常なれとも盂蘭盆と精靈祭とは根本的性質の別なるものてあらふと思ふ。精靈祭といふは春季皇靈祭秋季皇靈祭神武天皇祭等の

類にして。忠臣孝子か皇祖皇宗を始め奉り手近く云は丶君父を思ふ心より祖先を尊崇敬禮する事てある。盂蘭盆とは前に述へましたる如く亡靈の苦患を脱し。樂境に轉するために行ふ所の法會なれば。混すべきものでは無からふと思ふ。

然れは精靈祭といふ名を廢し。精靈棚といふ事を禁すれは盆會に種々の物品を供へて亡靈を祭ることこと差支なき歟と申すに。たとひ精靈祭といふ名を廢することも精靈棚と稱する事を禁するとも。亡靈を祭るといふ趣旨か精靈祭にして。盂蘭盆の趣旨に非さるなり。盂蘭盆は救倒懸と譯して苦患を救ふと申す事である。苦患を救ふ道に大衆供養の功德を教へたまひたか盂蘭盆經の佛說てある。亡靈に物品を供へよといふ事は說きたまはぬのてある。依之性質の異るを知るへし。

或宗教局外者か精靈祭の兒戲を愚弄し冷評した言かある。十萬億佛土を過た向ふから。素麵や瓜茄子を喰ひに來る亡靈なら。餓鬼に相違なひ。苟くも佛果を開く身とならは。禪三昧爲食てあるもの。素麵や瓜茄子を喰ふ世話のなきのみならす。山海の珍味に用事なき筈なり。若し餓鬼とすれは氣の毒千萬の次第にてある。素麵や瓜茄子の馳足に遇ふて戻り掛れは。途中に迦ひ火の催促を受年々歲々往きつ戻りつ精靈棚に往復して居らねはならぬ事てあると。是亦一場の戲論なれば敢て取るに足らぬ事なから。佛者に於て正道さへ踏て居れば斯樣なる愚弄冷評は起る氣遣なひのてある。

佛者に於て正道を踏むといふ事は。いかなる點を指すそと申すに。盂蘭盆會は目連尊者の心を心として大衆供養の功德を積むのてある然るときは死したる父母に追孝を嘗むの法となるは勿論。父母孝生

中と雖も之を修すれは父母は福德圓滿壽命長久の幸を得て。死後猶善所に好果を結ふへし。加之眷屬より一切衆生まで惡趣を轉して善趣に移るの仕合を得るに至るとの佛說てある。佛說には虛妄かなひ故如說修行の人に其益のみもるは必定なれとも。如說修行の人に乏ひ今の世なれは。目連尊者の心を心として大衆供養を行ふなとゝは云ふへくして行ふこと能はさるものと思ふ。

我等は目連尊者の心を心とする事は出來ませぬから。宗祖大師の心を心として盂蘭盆會を勤めませふ。宗祖大師の御心はいかなる御心てありませふ。父母のためにとて一遍の念佛も申したることなしと仰せられたか宗祖大師の御心てあります。依て精靈棚を造る世話はもとよりなし。施餓鬼と盂蘭盆と同なりや異なりや議論する必要もなし。畢竟彌陀大悲の誓願をふかく信せんひとはみなねてもさめて





もへたてなく。南無阿彌陀佛をとなふへしとのたまへる和讃一首にて滿足か出來るのてある。今一つ云ひ換れは佛願を信して佛名を稱へなから。盆會を勤るのてある何と心得易き事てありませぬ歟。

佛願を信して佛名を稱ふるのみに事足るといはゝ。盆會と稱して故らに日を刻するにも及はぬてなひ歟と申すに目連尊者の母上の故事を追想して。報謝の大行を相續するに燈籠を釣る位の事は世俗に習ふて致すも敢て宗意に差支はなからふ。否親子の間に恩を知り道を履むものゝ出來る事もあるのてある。古來盂蘭盆會に釣る燈籠の形に就て云ふ所は目連尊者の母親か盂蘭盆の功德によりて上天したる時の形を寫したものなりと傳へます、古句に「父さまやこの燈籠か母さま歟」と讀てある此句意を探るに母に別れて後盆會の寺參り父に手を曳れ行く幼兒か豫て目連尊者の母親か餓鬼道を脫れて天上界に

生れた時の形か此樣でありたといふ。燈籠の說明を聞覺にて居たもの故。亡き母を思ひ浮へた幼兒の眼に燈籠の形か映るまゝ父に對して口を開た實際を讀たのてある。幼兒の心は全く此句の外にあるまひと思ふ。斯樣なる母子の情愛云ふにいはれぬ趣味のある事をあらはすも燈籠の緣かあるからてある。精靈棚の如き物こそ取るへき筈て無けれ。燈明を點する一具となるの燈籠は嫌ふにも及ひませぬ。只佛願を信し佛名を稱ふる範圍外へ走り出ぬ樣すへきてある。右の如く心得てみれは一年に一回定れる日を取り盂蘭盆會を勤るも宜し平生に釣らぬ燈籠を製して光りを點するも宜し。其を緣としていよ〳〵信心堅固に稱名相續するか肝要てある

他力の宗門にありて。自身の爲に神佛に現在を祈ることは許可せざれども。他人の爲に幸福を祈る事は許可すこしなこと牟盾の說を吐



くものあれとも。苟くも我宗祖の門下に育つもの自他何れの爲にも現在を祈る樣の不料簡は起すへからす。古歌にも「一筋に誠の道に叶ひなは祈らすとても神や守らむ」とあり味ふへき事てある。和讃に。佛號むねと修すれども現世をいのる行者をばこれも雜修となつけてそ專中無一ときらはるゝ」と仰せられたは自のために雜修となれとも他のために雜修とはならぬといふの思召ではなひ。平心虛氣に拜讀してもらひ度ものてある

戰爭か起りた御祈禱せよ。病氣か流行する御祈禱せよとはいはぬ替り。平生業成の宗義に於ては金剛堅固の信心を決定して常に稱名念佛しつゝ根機ありだけ。家業家職を勉强し富國强兵の基を鞏固にせねばならぬ。朝家の御ため國民のため御念佛申さるべしの御教訓は此意を出さるものと伺ふへき事てある。筆痕を伸してみれは佛願を

信したる上に佛名を稱へて日夜を送るへし。其か朝家の御ためてある國民のためてあるといへる思召なり。いかにも相違ありませぬ「南無阿彌陀佛をとなふれはこの世の利益きはもなし流轉輪廻のつみきゑて定業中夭のぞこりぬ。天神地祇はこと〳〵く善神鬼となづけたり。これらの善神みなともに念佛のひとをまもるなり。願力不思議の信心は大普提心なりけれは天地にみてる惡鬼神みなこと〳〵くおそるなり。南無阿彌陀佛をとなふれは十方無量の諸佛は百重千重圍繞してよろこひまもりたまふなり」とのたまふ是等の御和讃によりてみるも佛願を信し佛名を稱ふるに勝る御祈禱はなひのであるといふ事明了てある

例年の盆會とは精靈棚を廣くして。御供物を丁寧にせよ軍人の亡靈か多くあるなど丶寐言を吐て識者に笑ひを受る耄碌者の尻追ひしてならぬのみならず。寸毫も其樣なる妄影を念頭に留めてはなりませぬ。盂蘭盆會に當りて軍人諸士の戰死を追想し。盡忠報國の名譽を慕ひ。比況海山の洪恩を報せんとするの念を深くすへきは勿論てある。其恩を報するの道は常に教誨を蒙むる二諦相依の定義を全ふ用ゐるはかりに足るのてあるから。六かしきことはありませぬ二諦の宗義を全ふ用ゐれは。何れの方面に向ふても恩を報する事になる。所以はいかんと申すに自信教人信の德は王法人倫の道と並ひ進みて行く。故國を忘れす民を忘れず上を敬ひ下を憐み手の舞ひ足の踏む所。禮義を紊さす坐作進退の總てか他の龜鑑となるの仕合。不知不識の間四恩を報することになります。墓畔の草を刈取て水を灌き。青竹の筒に花を挿み。一縷の線香に亡魂を招く積りは畢竟烟程も目的にはならぬものなれば。誰も彼も速に報土往生の正因たる他力信

心を決定して。報恩謝德の要行たる他力念佛を稱へつゝ。人道を履行しませふ。私を離れたる所業は圓珠の背面なきか如く玉鏡の表裏なきか如く。十方を照しますから戰時と常時の別なく。盈會と平常とに差なく其利益空しからすてある南無阿彌陀佛

（四十四）凱旋祝賀會

朝日か丶やく日の本へ
名譽の軍人いさましく
わか大君の御こゝろに
すてし命をひろひて
くろき兵士の顏なかめ
きつある夫の顏をみて
父樣御歸りなされたと

朝日の御旗か丶けつ丶
凱旋するこそ愉快なれ
いかに喜びたまふらむ
二たび御國へ歸ることゝ
うれしなみだに咽ぶ親
おもはず涙をおとす妻
かしづき乍らほゝ笑兒





皆々無事にありたかと
手に手を取ての喜びは
泣くも笑ふも諸ともに
因緣によて起りた戰爭は。因緣によて收りました嬉たひ事である。
是も煩惱側から打算するときは講和談判の結果に就て異論もありませふけれども畏れ多くも
開けゆく道にいて丶も心せよ
つまづくことのある世なりけり

兵士は言葉やはらかに
何にたとへむ物もなく
嬉しと云より外はなき

いかならんことにあひてもたゆまぬは
我しき島の大和たましひ

ご御製にのたまひてあれは。兎にも角にも我々は終局の今日を喜はねはならぬ。實に嬉き事であります。天子樣の手足と成た身の上な

れば十分働き戰死して吳れ。生きて還るを待ちはせぬぞと口にては云ふもの丶。心の底に生きて還るを待たぬ親は一人も無かつたであらふ。兵士を送るの途次に萬歲〳〵と呼ぶ聲は勇ましく。潔く聞ゆれども妻たるもの子たるもの。兄弟姉妹たるものに聲のうるまぬものは無かつたてありませふ。眼に涙を含まぬものは無かつたてありませふ。是等の人々か凱旋を喜はずに居られませふ歟

そも〳〵開戰以來軍人諸君の御苦勞は。筆舌に盡す事は出來ませぬ寒熱と鬪ふのみにても想像の及ばぬ所であらふと思ふ。其寒熱の中に激烈なる戰爭をして敵に背後をみせぬといふ。勇猛精進の兵士であるもの。辛苦艱難の多大なること比すべきものはなき事勿論である。我陸軍の戰病死者は。總計七萬二千四百九十餘名にして內戰死者四萬六千百八十餘名。負傷後死亡者一萬〇九百七十餘名病死者一萬五千三百餘名なりと申す事である。世界に於て今日までの大戰爭多々ありし中に比較上死者の少なく。且病死者の戰死に比して四分の一に過きさる如き。古來最も稀れなる所なりと聞く。是全く軍隊衛生の行屆きたる結果に相違なひか。定めて呑み度水も呑まずに渴を恐ひ。放逸に爲し度事も謹んて守りた故てあらふと思へば。一層當時の辛苦を思ひ遣らる丶事てあります。是等の事は各外國に對しても誇らるゝ仕合。常に教育衛生並ひ進んて居た御蔭てあらふ歟と思ふ

軍人の御苦勞は申すまてもなひが。居殘りて留守をしてる人々の辛苦も亦謝すべき價値は十分あると思ふ。戰爭中は非常の勤儉を行ふたのである。一にも節儉二にも勤勉皆是何の爲であるかといふに。國債の募りに應ぜねはならぬからである。赤十字社にも加入せねば

ならぬからてある。愛國婦人會にも入會せねばならぬからてある。恤兵部にも金品を差出す爲てある。軍人家族遺族に慰問せねはならぬからてある。傷病兵士を病院に慰問せねはならぬからてある。遺族救護會にも加はり度からてある。出征軍人を送るにも傷病兵士を迎ふにも先立つものは金錢の必要ある故てある。一口にいはゞ斯樣に國民の一致して財產を惜ます。國家の爲に盡す事が無かつたならば連戰連捷を我に持通す事は出來なかつたてあらふと思ふ。たとひ國民は財產を惜まず君國の爲に盡すとも軍人が生命を惜まず國民の爲に代はらされは戰勝を得る道理はなひのてあれは。相互に恩を忘れずに行かねはならぬのてあらふと思ふ

戰地にありては悲喜苦樂の總てが。極度に達したさうてある。依て、嬉ひ事にあへは非常に嬉しく感し。悲き事にあへは非常に悲く感しるから。苦樂の感も隨て强かつたてあらふと思ふ。軍人は故鄕を忘れ父母妻子を忘れ。何も彼も忘れて居ると新聞に載てありたれとも決して故鄕を忘れはせぬ忘れねはこそ御奉公も出來たれ。總てを忘れる樣な者は君國を忘るゝ者てあると凱旋軍人の某か語りた。成程生命を惜まずに戰爭する姿勢をみる時は已れを忘れて働くのてあるから。故鄕も父母も忘れて居る樣なれとも。中心には總てを忘れて居らぬといふが事實てあらふ何より彼よりも故鄕の音信到着か嬉れしかつたと凱旋軍人某か語りたるにても。常に忘れて居らなかつたといふの相像か出來る

拙僧か外國漫遊中某地の氣車に同乘せし中の一人が日本人に似てありたを認め。日本人の積りたに言葉を掛し處。一の應答もせぬのみならず不審の顏色を呈したから。言葉を改て話を試みしに果して彼

れは西班牙人でありた故。相互に大笑を洩した事でありた。海外にありては故郷を慕ふ心の深きため。日本人に顔か似てありてさへ嬉しかつたのである。又留學中郵便の着して手に取上た時。慈母の直筆は勿論朋友其他の來信に接するは面話する心地せられて。幾回繰返すも飽かぬ事でありた。拙僧か自らの既往に比況し。軍人か一身を犧牲に供して居乍らも。中心に故郷を忘れぬ人であるもの萬金を手にするよりも。一封の書信が嬉しかつたに相違なひと思ふ

書信の内容によりて喜びの淺深厚薄かありたといふ事である。其委細を聞けば多類あれども。其中に於て一例を擧ますれは家族の健全なるを知りた喜ひと。生計に安全なるを併せ知りた喜ひとを比較すれは。前者は淺薄にして後者は深厚である。又國民一致して援護の强きを知り或は宗教の妙味を告來りたを見る時は。前に深厚の喜ひ



てあると申した生計安全の報知の如きは。淺薄の部に屬する喜ひと成たさうである。斯樣の喜び話は戰爭によりて得たる所の一の賜物なるべしと信せらるゝ事である。拙僧は海陸二軍に通して緣深く。知己多き故に戰地に向て書信の往復も數多く致したが。軍事郵便と捺印したる書簡を受たるもの四百餘通ありますが。一として宗教談なきはなし先其一を拾はゝ

拜啓時下炎熱之候御座候處。益御清健爲國爲法御盡力被遊候御事喜悅仕候。隨而小生儀御庇蔭により無事健康從軍罷在候。豫ての御教示により現當二世共に更に憂ふる處なく。順緣逆緣に際會する毎に御高恩を仰き居候間乍恐御安神被下度候。當方面に於ては奉天會戰後著るしき行動も無之目下勤務の餘暇には不潔なる蠅征伐致し居候……當地は連日の降雨に閉口致し候ひしが

昨今漸晴天に復し今明両日は我師團大祝捷會に之あり夢にも思はざる盛大にして。團下各部隊は我れ劣らしと餘興を演し。大に積日の勞を慰め申候。若し我等露國の臣民たらは如何して恐ふべきやと思ふて。此に至れば御稜威の高徳を仰き奉らさるを得ず。御地寄送の慰問袋も當地に着して分配相成大に歡喜仕候。就中遵守會發兌の誠之光ありて法潤を受け渇したる身に水を得たる心地致し申候は先は暑中御伺旁如斯に御座候頓首

大道をすゝめは心廣きなり

二世に障りのなしとおもへは
二世ともに障りなき身となりにせは
なさしめ給ふ恩のたふとき
尊とさを思ふて恩を謝するなり

政井拜

南無阿彌陀佛南無阿彌陀佛

征露二年八月廿一日夕

小泉尊師獅子座下

文に長短巧拙の差はあれとも。右樣の意を含まぬ書簡は受た郵便に一通もありませぬ。只拙僧が杞憂を抱くは今後に信念の色がさめねばよひといふ一事である。曾て大病人の枕許に一言の法話を試みし時。十分に獲得して模樣を見受たる信者といふべき人が病の平癒し壯健に復したる後信念頓に失せ。宗教の香もせぬまてに白々しくなりたものあり。是等に類似の者とならは遺憾至極の事てある。彈丸雨來の中に今を限りと働く時は。無常を感して宗教心を發し。隨て信念の厚かつた身が事落着して彈丸に中る氣遣なしと氣か緩みたる爲。無常を忘れ終に信念を去る樣の人はあるまひ歟。眞實信心の行

者ならは失せる筈はなけれども。案しらるゝ所である。戰爭は休止しても軍人は凱旋しても。無常と我等の戰爭は今猶眞最中なれば油斷すべき所ではありませぬ。凱旋の今後は一層國民一同に宗教心を深くし。如來の慈悲と智慧とを領受の上活きた運動を爲さねばならぬのである

（四十五）　軍馬追弔會

從來追弔法會に數多く遇ひましたか。軍馬の追弔法會は今回か初てある。是は戰爭に依ての賜物てある。戰爭によりて佛陀の御慈悲か顯現したのてあると信します。私は一昨年來彼地此地に開かるゝ追弔會に列りて標札をみるに征露軍人戰病死者云々と記するあり。征露戰死病沒者云々と云もあり。日露戰死者と書しもあり書樣一準ならす。區々てありた。私の愚見は第一に征露の文字か穩かならぬと氣付たのてある。戰爭はもとより彼我衝突の間に勝敗を決する事すれは彼よりは征日と云ふへけれは我よりは征露と云ふへき筈なれとも。死者に對して追弔法會を營むに於て敵味方を論するは佛者の意に非すと思ふ佛陀の慈悲は怨親平等てある。彼我を區別する筈かなひ赤十字社の規則さへ彼我の別を論せす敵も味方も共に收容治療するてありませぬ歟。生者に對して平等の愛護を爲す赤十字社あるものを死者に對して彼我の別を立て征露軍人と限り。我方を收めて彼方を除くは大に佛意に背く事てあらふと思ふ。第二に征露の二字のみならす。軍人と限るをも改めて日露交戰忠死者云々として貫ひ度のてある。軍人の文字ある爲他に洩るゝものあるの感ありて。意を盡さぬ樣てある。戰爭に關し死たる中には非軍人もあり。犬も猫も馬も牛も其他夥多しき事てあらふと思ふ。依て日露交戰忠死云々と

者ならは失せる筈はなけれとも。案しらるゝ所である。戰爭は休止しても軍人は凱旋しても。無常と我等の戰爭は今猶眞最中なれば油斷すべき所ではありませぬ。凱旋の今後は一層國民一同に宗教心を深くし。如來の慈悲と智慧とを領受の上活きた運動を爲さねばならぬのである

（四十五）軍馬追弔會

從來追弔法會に數多く遇ひましたか。軍馬の追弔法會は今回か初てある。是は戰爭に依ての賜物である。戰爭によりて佛陀の御慈悲か顯現したのてあると信します。私は一昨年來彼地此地に開かるゝ追弔會に列りて標札をみるに征露軍人戰病死者云々と記するあり。征露戰死病沒者云々と云もあり。日露戰死者と書しもあり書樣一準ならす。區々てありた。私の愚見は第一に征露の文字か穩かならぬと



氣付たのてある。戰爭はもとより彼我衝突の間に勝敗を決する事すれは彼よりは征日と云ふへけれは我よりは征露と云ふへき筈なれとも。死者に對して追弔法會を營むに於て敵味方を論するは佛者の意に非すと思ふ佛陀の慈悲は怨親平等てある。彼我を區別する筈かなひ赤十字社の規則さへ彼我の別を論せす敵も味方も共に收容治療するてありませぬ歟。生者に對して平等の愛護を爲す赤十字社あるものを死者に對して彼我の別を立て征露軍人と限り。我方を收めて彼方を除くは大に佛意に背く事てあらふと思ふ。第二に征露の二字のみならす。軍人と限るをも改めて日露交戰忠死者云々として貫ひ度のてある。軍人の文字ある爲他に洩るゝものあるの感ありて。意を盡さぬ樣てある。戰爭に關し死たる中には非軍人もあり。犬も猫も馬も牛も其他夥多しき事てあらふと思ふ。依て日露交戰忠死云々と

記する中には彼我両國の軍人は勿論非軍人や牛馬も總てを含むから此心得か至當ならむと思ふのてある。斯くの心得てあるから私の意中には追弔會に軍馬を洩す念はなけれども。軍馬と故らに名を顯揚して追弔會を營まるゝ席に出たは只今か初會てある。第三に法會を營む心底か我宗規に在ては報恩て勤むるのてある。事を忘れてはならぬ恩の事は常に御話してある故に。今は畧省しませふ。人類中相互に恩の待合なるのみならぬ。馬にも牛にも犬猫にも恩はあるそてある。行基菩薩の歌にほろ〳〵と啼く山鳥の聲きけは父かとそ思ひ母かとそ思ふと讀まれてあり。殊に一昨年來徵發軍馬の如きには大恩かあります。騎兵に功を奏したは馬の恩てある。輜重に功を奏したも馬の恩てある。武生町の龜谷と云ふ人か主唱者と成て向ふ一年間馬肉禁食會を設けて恩ある軍馬に屠殺期の逼らさる樣企圖せしは



至極美事てありた。私も贊成者の一人てある（贊成せぬとて馬肉を食せされとも）馬肉禁食會は設けられても。死した軍馬は多數てある是等に對して設けられたか。本日の法會なれは申すまてもなひ善事てあるさりなから。此法會を勤めてやりたら死た軍馬は緣のある馬頭觀音位にはなるてあらふと云ふ樣な心を持て貰ふてはならぬ。法德は觀音にも彌陀にもする德かありませふけれども。我々の勤め心は先に述ました如く報恩の心の外に出てはなりませぬのてある。皆さまか本日此席に如是好緣に遇へるも。軍馬の恩といはねはならぬ道現てある。恩ありと知らは恩を報するか界當てある。國家の爲國民の爲働て吳た馬の恩を報する爲に法會を開かれた。善緣により て尊とき御法を聽聞の出來る是亦恩の重ね被てあるから重ね〳〵の恩を報せねはならぬ。速に未信の人は信心決定し行先きに心配を去

り稱名念佛相續しつゝ美くしく生涯を送りて下され信心決定の行者ははからさるに五常もおのつからそなはり候へし。其色へは眞實信心のこゝろあれは物をあはれむこゝろもあり。物をあはれむこゝろなくは信心具足の人とはいふへからす。信心を具ふる人は無理非道を構へす。正直正路にして禮義をすこしも亂すへからすと。先德も仰せられてあります。既往は兎も角も只今我も人も。

地金たゝけは。三毒五欲まいれそーなる音はせぬ然るに有難や。

罪も深ひか障りも深ひそこて御慈悲か猶深ひ。

何と信せすには居れぬ筈てあらふ稱へすには居れぬ事てあらふ。人として道を踏み違ふ事は出來ぬ筈てある。馬の御緣によりて皆樣か斯く佛願を信し佛名を稱ふる正定聚の菩薩となられたら。馬はいかはかり喜ふてありませふ。是はと報恩はありませぬ先。



## 附錄

### 釋尊の再誕を祈る

文學博士　前田慧雲師講話

私は釋尊が御入滅なされた以後。其佛の敎卽感化なるものが如何に變遷したかと云ふ事を平凡に申上げて。今の世に釋尊がモー一度是非御再誕くださらねばならぬといふ希望を申述べやうと思ふて居る先づ釋尊の感化が偉人であると云ふ事を證するには。其御德の如何程までに圓滿廣大であつたかと云ふことから申さねばならぬが。今は左程の時間がないのみならず。佛敎國たる日本人として生れて居るお互は不知不識の間に既に充分了解して居る事と思ふ。兎に角釋尊が事實上非常にドエライお方であつた事は既に已に經文の上に於ける總ての點に於て窺知することは難くない。私は西洋の事に就ては多くの智識を以て居らぬけれども。今日までに聞知した範圍に於

て。否全然佛教の如き廣大深密な思想は到底西洋に求むる事は六ケ敷い事であらふと思ふ。一寸其時間的の説明に就ても西洋では唯「無限」といふ漠然たる言ひ樣で。其思想の廣大深察を缺いて居る。然るに佛經にては一例を擧けて見れば三千五百萬億那由多恒河沙の世界があつて。其世界の上に亦三千五百萬億那由多恒沙河の世界があると云ひ。又目にも見ぬ微塵の分子には三千五百萬億那由多恒河沙の微塵分子を有し。其分子を再び三千五百萬億那由多恒河沙に碎いて。三千五百萬億那由多恒河沙の世界に分つと云ふ樣な。重々無盡の華藏世界を説くが如き思想は。とても漠として「時は無限なり」と云ふ樣な西洋思想に求むる事は出來まいと思はれる然るに或論者は如斯深奥なる思想は佛教のみに止まらずして。既に印度に普及し居りたるものなるべしと云ふかも知れないが。佛教以外他の書





物に斯る思想が今日殘つて居らぬのを見ると。佛教以前には無かつた思想であると斷言しても差支があるまい今日ではウパニシヤツトといふて。釋尊以前に佛教的の思想があつたと持嘶す樣であるが其實仰々しくもて囃す程のものでなく。唯々歌句の間にナニイ〳〵と現はれて居る思想に。哲學的に價値をつけて見ると。どうやらそう見にくらしい位の事であるから。恐るゝに足るものでない斯の如く重々無盡にして廣大深密な思想は佛經以外他國の思想界に求むる事は出來ない。ツマリ佛教の專有物で古今獨歩の大思想であると云ふても差支ないことかと思はれる。而して斯樣な廣大な思想を宣説したのは誰であるかと云と即ち我釋尊其人であるされば。其感化力の偉大なるとは云までもないとで。五天竺は爲に風靡し尊信した。實に偉大なる思想は偉大なる感化を與るものであると云はねばならぬ

然るに或人は如斯は餘り手前味噌と評するかも知らないが。私は確信してやまぬものである。其故は如何であるかと云へば。僅に五十年の感化が五天竺總ての國總ての階級に及んで。其國王も人民も敬禮措く處を知らず。其の入滅後には御舍利の分配から悶着が起つて遂に戰爭を開いたと云ふ一事に徵しても明な事であろふ。それから又或一流の反對者や惡魔の爲めに刑せられたり磔せられたりする樣なこともなく。一切萬民を隨喜渴仰せしめ給ひて。所謂德禽獸に及び草木に及んで萬物が悉く其御入滅を悼み悲しんで吳れたと云ふ樣な事は。未だ曾て西洋にも東洋にも其類例を見る事が出來ないと思はれる。かの涅槃の繪圖を拜見すると。微笑を現はして入滅なされた其周圍に。一切衆生卽人も猿も鳥も草木も。大聖世尊の入寂を悲んで。敬悼の情に堪へない有樣が現はれ。何とも言葉では申しにくひ程であつて其感化が如何に偉大であつたかと云ふことを偲ばしておる。而も決して釋尊の容貌には苦みの色が現はれて居らないのみならずニッコリと笑つて。淨土に還歸なされたことは。今日の吾人にも亦大感化を與へる事柄であると思ふ。多くのものが其死に瀕するや悔恨の情に襲はれて。其身は此世にあり乍らも既に火車に運び去らるゝ樣な心地になつて。心細さ此上なく。とても生涯の滿足を得て笑つて涅槃に入ることは出來ないものである。然るに釋尊は其天職を充分にお盡しなされて。平和の理想鄕にお歸りになるのであるから我を救へよと悲しと絕叫を發して。苦しい顏をしては御遷化なさらなかつた。之れは實に釋尊の釋尊たる特長であつて。若し釋尊にして。其德と感化力が低かつたならば。幾多の惡魔が襲うた時に既に其刀に斃れ給ひて。苦々しい顏を殘してお死になされたかも

しれない。然るに釋尊が平和な涅槃を迎へられたと言ふのは。如何なる惡魔も如何なる夜叉も悉く其惡を擲て善に入ると云ふ。德と感化力を備へて居られた證據である。而して又其宗教的の感化ばかりでなく。其哲學的思想の廣大なる事も亦甚しいもので。唯或感情を利用して宗教々々と騷ぎ廻つたり。小說的の事柄を理屈をつけたりするのとは。すばらしい相違のあるものであろふ。何は兎も角幾多の外道や惡人があづたけれども悉くそれを感化せられて涙を流して釋尊の弟子ならん事を希ふに至り。其御入滅の當時には一人ごして佛足頂禮せね者の無かつた事は。自ら惡魔を感化する丈けの德がないために。遂に惡人の手に刑せられたと云ふ樣な歷史的人物に比すると。其感化と其德澤は霄壤も啻ならぬ有樣であつて。其人格の圓滿であつた事が充分に想像せられるであろふ。



斯樣に釋尊のお德は高く。其感化は偉大であつたからして御入滅後いつまで位。其感化德澤が及ぶであろうかといふに。之れも頗る大きなことが說てある。卽ち釋尊遺教の感化に就て。正法五百年。像法千年。末法萬年といふて。其年數には種々異說があるが。佛教通じて此義を取つて居る。マツリ此正。像。末の三時に分けたのは。其感化力の衰へ行く程度を云ふたもので古來よりの學者の說によると。正法の時は教行證の三つが具備して居る時代で。佛の教があつて。その教通りに修行する人があり。而も證悟する事が出來る。これが淸後二百年間の情況で。次の像法千年時代になると。遺教と修行の二つは備はつて居るけれども。其感化が漸く薄らいで來て。眞面目に修行をやるものがないから。證果を得ることが出來ない。最後の末法萬年になると。教のみが遺つて。如實に修行觀法するもの

なく。從て證果の妙覺を得るものがない。卽ち之れが今日の有樣である。

此感化力に三時の區別ある事は。修養の向上路を辿らんと心掛けて居る人々は對つて大いに參考となると思はれる。正法を過て像法に移るや。眞面目な修行が出來ぬといふのは。人間其者が惡くなつたのではなく。釋尊の感化力が衰へたからである。此現象は獨り釋尊だけの上に止まるのでなく。今日でも德の高い人に師事して。此の人でなくてはと。衷心から敬服して居る師匠の下にある時は。無文の律で。總ての行動が師匠の感化力によりて。不知不識の間に制裁を蒙つて。彼の德高い人の仰せなればと。一々信服して理屈や註釋の必要もなく。自ら力强く實行が出來てくる。之は何故であるかと云へば。其師の言葉のみでなく。其師の德が言葉と共に弟子の心に



泌み込んで。實行の上に偉大な力となつて現はれたる。結果であるしらず〳〵帝の則に從ふ樣に。釋尊の在世には何の理屈もなく弟子達が實踐窮行したものである。然るに師の側を去つて年處を隔つると。漸く感化が薄くなり。年に一二回の出入もしなくなつて。遂に其師の逝去に遇ふや。師の敎へられた事柄はチヲホヲ耳底に殘つて居ても。之を實行せしむる處の師德の感化力が減じて。何事も背戾したことをやる樣になる。之は誰人でも經驗のある事で。私共が塾に居た時もかたくるしい規則はなかつたが。先生の仰せならば是非なしに從ひ且つ行つて居た。然るに塾を出てからは次第に疎くなつて。遂には先生の金言は耳底に殘つて居ても。之を手足にかけて實行せぬ樣になつた。今日私が申す釋尊の感化なるものも全く此通理である。末法の今となつては其敎のみが傳つて。釋尊はどんな人で

あつた。斯んな方であつたと。學者が歴史を辿つて研究する樣になつては。其感化力は全く無くなつたと云ふてもよかろう。如何なる大偉人もて何時までも其感化力を保持繼續すると云ふことは出來ないものである。

然るに此感化力が永遠に續かないで衰へるとすると。其衰へた時が其人の教の命脉が盡きた時で。死物となつて仕舞ふた時である。そこで此の釋尊の感化力が衰へぬ樣にして益々其感化力を擴大にしないならば佛教は到底盛になるものでない古來の祖師や學者の骨折は全く此ためである。これによりて二月十五日に入滅なされた事のみを紀念として居ては。衰へた感化力を一層衰へさす傾があるから。四月八日に。生誕なされたと何時までも釋尊を活かして行かねばならぬ。そこで法華經には「常に靈鷲山にあり」と云ふて。其本體たる釋尊は常に生きて御座ると。即ち活かさんことにつとめた。然し乍ら四月八日の誕生日があれば二月十五日の入涅槃がある。

次に三千年の昔に印度に天上天下唯我獨尊と叫んで生れられた釋尊以外に釋尊はないのであるかと云ふと。其實お互一人々々の上に釋尊は誕生せらるゝのである天台宗の第二祖慧思禪師は非常に意志の强い方であつて大誓願を起され。弘法や傳教の樣に。此世に於て自分で證得することは不可能事であるから。彌勒の出世を待つて成等正覺するなどは薄弱極まる考なり。仍て我は末法萬年に釋迦佛の感化力が衰へて惡魔ばかりとなつた中に生れて。能く佛教を護持せんと誓はれた。斯かる意志と自信を持つ事が出來て初めて佛法興隆が容易となるのである。斯樣な考は慧思禪師一人のみでなく。各宗の祖師皆然りで。自ら釋迦を以て任じて其感化を施された。されば之

等の祖師方は悉く釋尊の再誕と見てもよかろう。祖師自ら口に擧々しく云はれないでも。其意志と自信を見て弟子方が釋尊の再誕とか彌陀の生れ代りとか云ふて居るのである。今日佛教を盛にして絶大な感化を施さんと欲するならば。徒に釋尊の出誕を願ふばかりでなく。各自の上に其生誕を力めねばならぬ。而して其方法は自已の修養如何にあるのである。之が現今の佛教徒諸君に對する私の希望で若し僧侶諸君の過半否百人でも五十人でも。其心願で修養せられたならば。末法々々と悲泣する時は夢と過て。直に佛法興隆の正法時代を現實さすことが六ヶ敷はない。ツマラヌ事にアセルよりも。各自に釋尊の再誕を計りて此佛教を世界に弘通せられんことを希望の至りに堪へない。



## 釋尊降誕會に就ての所感

（神田錦輝館に於て）

文學博士　井上哲次郎師演說

佛教の影響廣大にして東洋諸國の文明は主として佛教の力に依らざるはなく。殊に日本の如きは千三百年來社會の各方面に亘りてその影響を蒙らざるはなし。予の考ふる處によれば佛教の成立宗教中最も勝るゝ點は信仰と智識の調和を謀りたるに在り。佛教上の哲理は理性上の滿足と信仰上の安立と出來る限り調和せしめたる形跡あるは佛典を繙きたるものゝ等しく首肯する所なり。是れ他宗教の多くは一方に偏するが常なるに佛教獨り此點に於て他宗教に一頭地を拔んずる所以なり。世人佛教を稱して偶像教となすも原始佛教よりは直接偶像崇拜の信仰を抽出すること能はざるなり。こは后世愚民の所信より出たる變態的現象なり。元來佛教は自力を主とする教にし

て後世他力教出でたるも釋尊出世の經路は自ら勉强して自ら開悟し終に天上天下唯我獨尊の境界に立て。彼自身に崇拜すべき一物もなし是れ自力にあらずして何ぞ。特に佛教は我か東洋に向て吾人の千古忘るべからざる一大文明を傳へたるものあり。其一大文明とは何ぞ。國民の腦裡に寂然不動の大精神を扶植せしめたること是れなり由來東洋の武士道は精神界の根據にして外界に依て動揺せざる底の內觀的修養なり釋尊卽ち之を傳へたるなり。而して是を養ふに禪定なるものあり。此等を直接我が東洋國民に傳へたるは佛教なり。儒教も與つて力なきにあらざれども主として佛教の賜なりと云はざる可らず。此の寂然不動の大精神は西洋文明の活動と共に大に養成せざる可らず。此の寂然不動の精神なき活動は人心輕浮に流れて一國の元氣の消長に關す。斯の如き精神的訓誡を傳へしは卽ち釋尊なり



此禪的精神を皷吹したるは當時佛教のみに非ずして外道の間にも唱へられたりと雖も佛教のそれとは大に其趣を異にするのみならず他外道のそれは我東洋諸國に傳はらざるなり。

今や我國戰捷の結果。歐洲列國の注目を惹くに至り茲に日本と云ふ好個の研究題目を捕へたるかの如く我國の研究に從事するもの日々に多く。我邦柔道の如き倭小の者六尺大の男を容易に擲倒するを見て外人太く驚嘆し。今日にては歐羅巴大陸に此柔術の流行頗る盛にして我邦より其指南教師として聘せられたるもの甚だ多し。以上の如き形而下の柔術は外人已に認知するに至りたるも。佛教の傳へたる寂然不動の精神上の柔術は未だ外人の知り克はざる處。況んや戰捷の原因も全く此の精神上の柔術に歸因するを知るに於ておや形而下の柔術は嘉納氏の門弟世間其數に乏しからざるも精神上の柔術卽

ち寂然不動の大精神に至ては國民擧て禪僧の如くに感化を受けつゝあるものなしと雖も。此思想は間接に普及せられつゝあることは蔽ふべからざる事實なり。

佛教は今を去る二千六百年以前の宗教にして殊に人情風俗を異にせる印度に發起したるものなれば佛教所說の一々が皆な今日の時代精神に適合せざるや明けし。されば佛教の生命をして世の變遷と共に光明を放たしむるには其時代時代に從て大に改造せざる可らず。其時代の學術と合せざるものは容捨なく棄却せざる可らず。是れ佛陀に忠實なるなり。古來より一宗の開祖と仰がるゝ親鸞。日蓮と云ひ道元。法然と云ひ皆其時代の改造者たらざるはなし。今や改造者の出現を要するの時なり。而して其人誠に寥々として曉天の星と云はんと欲すれど其痕跡だもなきを如何せん。然らば佛教の如何なる點を改造せざる可からざるか。そは多くあるべきも要するに佛教は當時印度の社會狀態に適合して起りたるものなれば。今日我國社會に適合せざる諸點を變更せざる可らず。例へば佛教にて因果應報を說き道德思想の基礎となすも。科學の進步は世人を信ぜざるを如何せん。之は其因果應報の範圍を制限せざるより來る。弊にして。若し夫れ制限を附して說かむか因果應報の道理は千古萬古動かすべからざる一大眞理なり。然るに從來佛教所說の因果は自然界の因果と人間界の因果とを混同して說きたるため現在一世にては善惡の報償不權衡となるより。三世因果說を立てたり以上の說明は靈魂轉生說を基礎とせるを以て其立脚地既に假說なるが故に。其論證も的確ならざるは當然なり。故に因果應報と云ふ事は自然的因果に適用すべきものにあらずして人間界の因果にのみ行はれ得べきものなることを

知らざる可らず。假令は地震海嘯の爲めに一命を奪わるゝが如きは自然的因果換言すれば物理的因果にして人間界の因果にあらず故に之を以て罪業の爲なり惡行の報償なりと爲すを得ず。去れど人間社會には因果應報は歴然たるものにして善因善果惡因惡果は動かすべからざる眞理なり次に佛教の欠點とすべきは人格の考明瞭ならざるに在り。西洋の宗教倫理にては人格が甚だ明瞭なるより道德宗教進歩す。之に反して佛教は人格次第に消に失せり傾向あり。轉回轉生中は人格を認むるも解脫すれば人格を沒却す故に概して佛教は一個人の人格明瞭ならずされど佛教は人格以上の人格を認むるものなり佛陀の如きも最初は普通の人間として生れたるも。生后種々修養の結果。終に人格以上の人格たる佛陀となるに至りたり。故に佛教は此の人格と人格以上の人格即ち神格との調和を計らざる可らず。以上列擧せる諸說に就て改變すべきは佛教に取りて急務中の急務なるべし。吾々は釋尊を人類中より脫出したる世界の偉人として恭敬の念を起すと同時に。其事業其教を取て以て自ら世に處せざる可らず

（釋尊降誕會に於て）

## 佛教の國家的實現

苅谷無隱居士演說

維新前官軍と幕軍と戰つた。其官軍の軍用金が僅か五百兩でおまけに大津へ大砲を忘れて來たと云ふ無規律なる軍隊であつた。大鹽平八郎事件の時には德川の旗本八萬騎中。無妄の士が三名で甲冑の武器を蓄へて居た家が三軒。田中彌五郎と云ふ學者の弟子に或る家老の子息が有つたが。其弟子が師匠の姓名が讀め無つたと云ふ滑稽もあれば。或時師匠の田中先生から饑饉の折にはドー處置するかと問題を出したら。此家老の馬鹿息子の餅を喰つて居ればヨイと答へた

抑は滑稽以上の沙汰である。斯る大平寧ろ蒙昧の世の中から明治の維新を産み出したのだ。ダカラ此際薩長の二藩が無つたら此大業は到底擧ら無つたゞろ。薩の西郷隆盛は信州の碓井峠まで進軍するに十年はかゝるだろと思つた時節も有つたソーなが。夫れが僅に一ケ月で江戸城下まで進軍が出來たには驚いた。夫れが何故と云へば幕府には兎も角英佛式の新訓練を歴た兵隊がある。官軍は無訓練の烏合の雑兵であるダカラ西郷の杞憂も無理はない。然るに此意外の勝利を得て德川の勢力を一時に驅除したは何んの動機であるか。此處が所謂「佛教の國家的實況」である。と計りでは判り兼ねるが我輩が勝伯の死ぬ一年前に面會をした節。慶喜公が意外の場合に大政返還をした理由を尋ねた事がある。其節承つた勝伯の答に由て初めて慶喜公の決心の由て來る處を了解すると同時に。所謂佛教の國家的實現が意外の處へ活動して居たが判然した。夫れが則ちコーである昔德川家康公が緇衣の顧問たる天海僧正の扶佐によりて天下を一統して後。天海僧正が改めて家康公に忠告した辭に。物興れば衰へ衰へふれは必す亡ぶ。德川の天下も亦此興亡の天則を脱する能はず。然るに貴公は豐臣家を驅逐して大阪の天下を奪ふまでには隨分如何はしき無理非道もした事も。後日此天下を失ふ場合には責めては血を流さぬ手段を廻らして男らしく城を明渡す樣。今より此不殺主義を旨として此天下を組織すべしと云ふであつた。其處で理に敏なる家康公は僧正の言ばに敬服して其積りで凡ての施政を執つた。ダカラ德川の石高八百萬石と云へゞ。一も纏つた領地はなく其處で二萬此處で十萬乃至十五萬と云ふ樣散り〳〵の土地を領して代官を置いたのであるから。一朝世が末となつたら到底强敵を相手に戰ふこと

の出來ぬ樣に仕組んでおつたのだ。其處へ嘉永以降燃へ立つた國士の議論が尊王攘夷から。一轉して尊王討幕となつて來たから。流石明智の慶喜公は曩祖の遺訓に回想して大政返上を斷行したのであるダカラ我輩は明治聖世の今日が公武の間で目出度和衷協同した結果を觀て。佛教の國家的實現と斷定するのである。加之慶喜公が大政返上を斷行して世は愈大政官の新政となり。其役所を二條城に設けて多數の參與を集めて施政革新の方法を議した時遙か末席に在りし王松操と云ふ人物が。鎌倉時代に基づくとか。藤原制度を取ると云ふ上席諸氏の議論を否定して。新政の方針は。神武の創業を標準とす可しと喝破せしより。議論忽ち是に一決して遂に今日の盛世を産むことゝなりしが此人は元は眞言宗の僧侶で。時勢の趣向を觀破して身を世間門に投じ。新政の始め參與の榮職に仕ぜし人なるが。根が大見識と大本領ありて形を俗門に降せしだけの偉物㊀へ。官廳に出仕する中も始終精進潔齋を守ること僧門に在りし時と少しも渝らざりしと云ふ。此人の議論の如きも矢張り佛教が國家に實現した一現象で。普通一般の才人位では到底企て丶及ばぬ處である云々

## 我國と佛教

在米國
醫學博士　男爵　高木兼寛師談話

同博士が今回コロンビヤ大學の聘に應じて渡米の途次。當地に寄港されし際。吾等數名のものに對して談話されたるものを余が謁臆に存じたる部分のみ筆錄したるものなれば。讀者これを諒せよ

布哇佛教青年會々長　小林參三郎識

武士道は我國太古ナギナミ二尊のときより起つたことであつて。臣下が君主を護衛するに死を以てしたのである。これは君若し斃るれば臣の滅亡も免かれぬとするのである。故に我國は君國であつて彼

の「君が代は千代に八千代」の歌のある所以である而して此の武士道を完成せしめたものは佛教があづかつて大に力ありである。

佛教の我國に傳來せしは。皇紀千二百年頃であつて。我國の文化に偉大なる影響を與へた而して奈良朝聖武天皇の御宇に至つて實に隆盛を極めた其前後に名僧大德の唐より渡來し亦我國より名僧の入唐するもの多く彼の文物をもたらし來り政治に教育に建築に彫刻に繪畫にあらゆる精神的及び物質的文明の進化に對し大に貢獻するところがあつたのである。

其後平安朝に至りて佛家に名僧を出して我國有の思想と調和融合して遂に佛教は我國の思想界を支配して。此時に至つて全く武士道の光輝が全盛を極めたのである。

こゝにまた天照大神は盧舍那佛の權化であると本地垂跡の說を立てたる聖僧行基は大和大鳥の鄕より出でゝ大に時の朝廷に信ぜられ。



幾多の大刹伽藍を建立し諸國を巡歷して河に架し池を開き山野を開拓し衆庶を誘導教化して大に世に貢獻したのである。

古來東西の英雄豪傑は悉く佛教に熱心であつて神明佛陀の冥助を仰がぬものなく。我國の二大政治家なる德川家康。北條時宗の深く佛に歸依せし如きは人の知る處である。殊に泰時の如きは栂尾明惠上人の教を守り北條數代の治世をした。時宗の蒙古十萬の兵を鏖にしたのも矢張佛法卽禪學の筆法でやつてのけたのである。彼の師たる無學禪師は宋より渡た豪僧であつて彼の有名の「珍重大元三尺劍雪光影裡斷春風」の詩は元の兵白刃を僧の頭に加へんとした刹那に詠んだのだ。此僧から時宗は元の事情をすつかり呑込み居たので時の朝廷より三度も御沙汰あるにもかゝはらず。非常の斷行をやつた。

全體日本人は宗教のない否宗教といふ意義をとんと知らん。宗教の

宗の字はウかんむりに示すといふ字だ大にしては宇宙の宇の字。宇宙の眞理を示し。小にしては一家の家の字の冠むりで。家の治を示す意義で。人間として宗教を信ぜずにはすまぬ。おれは常に人に向つて君は佛教は信ぜぬといふが。君等は六歳のときから既にお經をよんでをるのだと。いろは。にほへとちりぬるをわがよたれぞつねならむ

これは空海上人の作られたいろは四十八文字であつて佛教を以て一切宇宙の眞理を云ひあらはして日本の國音にあらはされたのである

君は葬式に行たとき四本の旗があろう。それに何んと書たてある諸行無常是生滅法生滅々已寂滅爲樂とある其れに同じ意義であるそれでも若は宗教はきらひ佛法は信ぜぬといふかと拙者は大笑した。

斯の如く佛教は前に述べた通り我國の大和魂を養成し人道の爲にはなくてならぬものである。拙者の監督する醫學校も毎月一回づゝ生徒に向て。村上專精。前田慧雲師を始め大家智識を招聘して說教をして貰ふて居る。かくして生徒を他日有爲の人物に爲し出界に出さんため悉く品性を修養さして居る。たとひ學術の點はよくても品行が方正になくしては點數がごつと降り我學校では及第することが出來ぬ。幾くら學術が非凡であつても品性の劣等のやからは猿に木のぼりを教へたと同じことで拙者は一切信せぬ。何の宗教でも宗祖の經文を悉く僧侶の手にまかせアウトクラシー的に寺や會堂のみで說教をして信徒は唯だこれを聽聞するのみに止るといふは實際その意を得んことで斯かる宗派は必ず弊害を來たすものである。現にポルトガルやスペイン國はそれなので。露國等もその結果を顯はしつゝある。それらの國は必ず衰へることを免れぬ。佛とは和名をほとけ

こ譯してぼとけ（脫解）の意味で宇宙の眞理を了解する教などである故に僧となく俗となく悉く研究して其宗義に通じ之によつて向上の神精を起し信仰を高めねばならぬはづである。さすがに親鸞上人は絕倫の卓見で僧俗共に經文を讀み宗義に通ずる教を敷かれた。斯かる宗旨は世道人心に大裨益あるは論より證據で眞宗の盛んな國。卽ち江州尾張越後等は日本で一番富饒の地をなして居る。佛教も時代に依て種々宗旨も起て來る奈良朝より鎌倉時代までは華嚴天台等で重もに王公貴人の上に歸依せられてあつた處が。鎌倉時代には世は戰國となりて武家の一派が一國の主となり英勇は諸所に割據し。朝に全盛を極めたものも夕には敵の爲めに亡され實に哀れの境遇に陷る世の中となり。安心立命をする爲めに寺參りするか學問して修養を積むといふ樣な事をする暇がない。





こゝに至つて禪宗なるものが盛んになり無學の荒武者もこの不立文字直指人心見性成佛の教義によつて安心し。我國に於て空前の武士道の美花をさかし燦爛人目を眩ますが如き盛況を呈した全く佛教のおかげである。前に述べた通り名高き名將は悉く禪僧に歸依して居た。楠正成は毘沙門天のもうし子で卽ち多聞兵衛といふて居る。湊川で打死の時七度生れ返て敵を亡さんといふた。佛法の教へで肉體は死しても魂しは死せぬこの覺悟であつたのだ。武田信玄。上杉謙信。足利尊氏等深く信仰する處であつて此の武士道を全く結搆したのだ。人間に信仰のないものが古來大業を成したものはない。また人に信仰せられるものではない。二宮尊德翁の如きも開墾の當時困難に際し七日七夜成田の不動尊に參籠されたことがある。この兼寛なども命を奉じて海外へ醫學を修むるも何卒我國民の心身健康を補

益せんとの信仰は一心であつた。歸朝二十有餘年間我海軍兵士の衛生食事の改良を計り聊か貢獻する處あり。心ひそかによろこび居る處である。朝廷より恐れ多くも其等の跡を賞せられて授爵の榮に與かつた次である。

## 信

（佛教青年會に於て）

文學士　野々村直太郎師演說

『命ありての物だね』といふ事がある。何事も死んでは駄目であるから先づ生きて居ることこそ肝要そといふ意であらふ。世間では此命といふ事を有形の身體上で云ふて居るけれども。人間は身體ばかりではない。形は無いが更に心といふ大切なものがある。然らば心の上の命といふは如何なる物であらふか。心の上の命は之を信といふのである。吾人の一擧一動は信が無ければ成立つ事が出來ぬ。傘をさせば雨に濡れぬと信するからさす。車に乘れば歩かなくて濟むと信ずるから乘る。人を呼べは答ふると信ずるから呼ぶ。此商買をすれば利があらふと信ずるからする。夜になれば暗くなると信ずるからランプの用意をする。唯に善ひ事ばかりがそうではない。某の家には金があると信ずるから盜賊にはいる。斯樣〳〵言へば必ず人を欺くことが出來ると信ずるからその通りを言ふ。すべて善につけ。惡につけ何事をするにも先だつものは信である。信が無ければ手も足も動かす事は出來ぬ。卽ち人間といふ一生涯は信なしには送ることが出來ぬのである。然らば善だの惡だのといふ道德上の沙汰は暫く措いて。先づ何よりも無くて叶はぬ物は信といふ一事であるのである。そこで。『信あつてのものだね』と云ふ事は如何なる人でも動かすことが出來ぬ。信は實に一切人間の生命である。

單に一箇人の上で云ふも此の通りである更に大きく社會の上で云ふても同樣である。若し信こいふ事の無かりせば。社會こいふものは忽ち自滅してしまはねばならぬ。殊に最近百年程の間に於て。社會の進歩は驚くばかりであつて。從て社會の基礎は信であるこいふ事が愈顯著になつたのである。蓋しその原因は二つに分けて話すことが出來る。まづ一ッは政治上の原因こいふてよからふ。今から百年程以前に遡れば。誰も知れる通りナポレオンこいふ不世出の英雄が現はれて。全ヨートロッパは爲に鐵蹄の下に蹂躙せられたのである。各國はいづれも皆戰爭の爲に惱まされた。チルソンがトラフアルガルの附近で西佛の聯合艦隊を粉碎したこいふのも丁度此頃である。歐州各國は鼎の煮に立つ如くに大煩悶大不安を極めた結果。いづれも安心立命の必要を感じて强固なる自信の上に立たねばならぬ。卽ち人は唯事物の道理を知るこいふばかりではいかぬ。固く信ずることろが無ければならぬこいふ事が。深く心肝に銘せられたのである今一ッの原因は文明の進歩こいふてよからふ。其次第は近世歐州人が教會の覊絆を脫却して思想の自由を得てより。色々の學者が現はれて研究を重ねた結果。之も丁度ナポレオンの出た頃から種々の發明工夫が出來て。社會の交通が非常に頻繁になつて來たのである。蒸氣力を應用すべき機關はワットによりて發明せられ蒸氣船は米人フアルトンの大改良によりて實用に供せられ。氽車は英人某の蒸氣機關東の發明によりて今日の如く運轉せしむる樣になつた。電信も素ドイッ人の試驗の結果幾多の改良を經て今日の如き便利を享受するに至つて。凡そ是等は遠くも百年前の發明であつて。氽車の如きも遠距離の交通は漸く今より七八十年前の事に過ぎぬのである。七

八十年といへば我邦の文政天保の頃である。文政天保の人は今日猶多數達者でながらへて居るのである。此外電話。電燈。電車の類。いづれも最近の工夫に係れるものであるさて此の如く最近世に至りて社會の交通が驚く程に至便となつた結果は如何であらう。云ふ迄もなく人と人との關係が數十倍密接して來たのである。交通不便の世の中でさへ信用無くしては立ち得られぬ自然の約束なるに。人と人とが斯樣に密接した上で。信の一字なくしてどうして社會が成立つ事が出來るであらふ。交通不便の社會では分業といふ事が發達せぬけれども。今日は何事を經營するにも分業の上に成立つのである誰もよく知れる事であるが。アタム。スミスといふ人の說に。一ッの留針を製造するに十八回の手數がいる。此色々の手數を分業法によりて分擔すれば。然らざる場合よりも二百數十倍の多數に製造し



得られると云ふて居る。此の如く利益ある分業は全く人と人との間に信用あればこそ成立つのである。若しも他人を信ずることが出來ぬならば。十八回の手數を一人で引受けねばなるまい。近々百年間の社會の發達に照らすも信が社會の生命であるといふ事は爭はれぬ眞理ではないか。

諸君人間の生命は信であるといふ事を忘れてはならぬ。善人も惡人も何か信ずるところあるによりて存在して居るのである。人は素より惡事を遠けて善事を勵まねばならぬ。之は申す迄もない事であるが。今は善惡の區別を論ずるのではない信といふ事が無ければ善も惡もないといふのである。人は徹頭徹尾信を以て其命とするのである。然るにこれほど大切な信であるに拘はらず。吾人の信は果して十分滿足を與ふる價値があるであらふか言ひ換ふれば。吾人は此信

を生命とすることによりて果して大安心大滿足を以て世に處する事が出來樣か。諸君之れ實に第一の大問題である。此問題は事實によりて解決するの外はない。吾人は一日世に在らば一日丈け。十年世にあらば十年丈け。其間滿月の如く缺くる處なき大滿足大安心で立つことが出來るであらふか否々平生最も深く信ずる親子の間に時に或は不和が生じ。夫婦の間に訴訟が起り兄弟は他人の始まりといふではないか。そこごころではない。吾人は自分で自分を十分信ずる事が出來ぬ。「明日ありと思ふ心の仇櫻夜には嵐の吹かぬものかは」。實際自分で自分の命を十分に信ずる事が出來ぬではないか。そして見れば吾人の生命として居る信は十分安心でない。何時破れるか分らぬ。金剛堅固でないのである。若し得らるゝものならば金剛堅固の信を得たいものである。併しながら此の如きの信が果して得らるゝものであらふか。諸君是れ實に第二の大問題である此大問題も前と同じく決して道理や理屈で解決は出來ぬ。吾人は同じく事實によりて解決せねばならぬ。事實とは如何なることを指すのであるか。釋迦如來は三千年前その王位を見すてその妻子を見すてゝ入山學道終に此金剛堅固の大信を得られた。之れ卽ち事實である。此事實が無ければ釋迦を佛教の開祖とは言はぬのである。三千年の昔は餘り遠きに過ぎるが。印度支那日本の三國にわたりて今日今時まで釋迦の教を奉じて此大信心の上に安住したものは數へ切れぬ程ある。それよりもモット確かな事實は先づ實地に自分でその大信を獲得して見ればよい何如にせば獲得が出來るであらふかといふに。別にどうするのでもない。どうするだの。こうするだの。といふ一切の小刀細工を止めて佛の心を以て我が心とするのである。佛の命を以て我命

とするのである。佛教で之を無我といふ。此境界が手に入る迄は火が降つても槍が降つても止まぬといふ熱心が必要である。

孤軍奮闘破圍還。孤軍とは何であらふか前に述べた如く吾人は自分ながら自分を十分に信ずることが出來ぬ。これぞ十分に信ずることが出來るといふものが一ッも無い。經には獨生獨死獨去獨來とある實に孤軍ではないか。然し吾人は茲で挫折してはならぬ大に奮つて目的を達せねばならぬ。大に奮闘の必要があるのである。そこで「縱令大千世界に充てらむ火をも過ぎゐきて佛の御名を聞く人は永く不退に叶ふなり」とある。釋迦の苦行も慧可の斷臂もみな孤軍奮闘に外ならぬ。圍とは何物であらふ。云ふ迄もなく聞法求道の障害をいふのである吾人は七重八重の重圍を衝て何處に行くのであるか南洲は還るといふて居る。さて面白い。還るといふからは何れ吾家で





あろふが。一百里程壘壁間。人により目的を達するに遲速がある其間はこうであるかと迷ひ。あゝであらふかと思案する。みな壘壁の間である。我劍既摧我馬斃。さすがは南洲翁である。終に美事に目的が達せられたのである。數多い軍人の中には劍や馬の御蔭で漸く軍人と見にて居る者が無いとも限られまいが。南洲翁は劍の御蔭や馬の御蔭で價値あるのではない。劍は無くとも馬はなくとも南洲は立派な南洲である。上野公園に立てる南洲翁の銅像は犬を伴へる一箇の野人に過ぎぬけれども。之が爲に翁の價値を割引する者は一人も無い。我劍と我馬とらず限らず我かと名のつくものは皆取り去つたところで無我ではないか。それであるから善人もいらず惡人もいらず男子もいらず女人もいらずといふのである。我がといふものを取り去るから自力を棄つるといふ言葉が立つ。そこでかりに他力

といふより外にないのである。我身現是罪惡生死凡夫云々之が眞の天眞爛熳の極點である。秋風埋骨故郷山。呼嗚目出度い故郷の凱旋かな。南洲翁の心事その涼しさが思ひやられる。這裡の風光言語道斷冷暖自知の外はあるまい。抑故郷山とは何處の山であらふか。人間到處有青山。大丈夫骨を故郷の青山に埋め了る。絶世の一大快事ではるるまいか。破圍還と云はれた主意も茲にある譯であらふ。原藉地の知れぬ行倒れとなつて。役場の厄介で假埋葬となるなどは餘り體裁のよいものではない。宜しく眞如大覺の故郷に土となるべしだ。安心決定鈔には阿彌陀佛は吾人の本家なりと示してある。阿彌陀佛とは何ぞ。金剛不壞の大信ではないか。（了り）

## 談話一片

文學士　野々村直太郎師講演

今日は求道難に就て。永たらしく話そうと思ひましたが時間の都合で變更しまして。茲に一話があるそれを話して責を免れましよう。其話は諸君善く御存知の。彼の眞宗强信者の庄松同行の話です。大體今日は通して佛教は難信難行たる事を云はむとせし人間か。眞宗の話をするのは變てはあるが。その事は止めにしたのだから。眞宗の話ても善しと致しましよう。御存知の通り。庄松は古人である其生國は四國でした。而して世にも稀れなる難有い同行でありまして。彼の興正寺派の者です。何故か非常に近在の人々より崇められたのです。

確か明治初年の事でありますが。或る他の信者か。或る僧に自分の

信心を申出て。其よし惡しを聞きしに。それにて結構なりとの答を得。また他の僧に同しく尋ねしに。それにては惡しと云ひしかは。其由を庄松に語りしに。庄松の謂く甲乙両僧は各其云處異なるは當然なり。其二僧が極樂を有せされは何を云やを知るべからず。誠の事を聞かむと思へば。本院の極樂を有する佛ならされば。到底能はざるなりと答へしとぞ。

又庄松或る處にて。病氣に懸れり。同行達は大に氣遣ひ漸く庄松を其家にまて携へ歸り扨て『庄松よ安心せよ汝か家に歸りたれば』と云ひ遣りければ。庄松の答に『何處に行くとも極樂の次の間なり』と此れは禪家にて云も他力門にて。其も極樂の次の間なり尚次に正松か臨終の辭世の言葉あり『正松汝死しなは立派なる石塔を立てむ』と云ひしに。庄松徐ろに『我れ死ぬるとも石の下には居らざるぞ』



と答へたりとぞ。

一休禪師の辭世に

われ死なばどこへも行かぬこゝにをる。たつねてきてもものはいはぬぞ。

一休禪師は自力門の人なるか。故に如斯云はれしものにて其意を體すれは。庄松の『石の下には居らぬぞ』と同し事で。而も其言葉の變て居る處か面白いのである。同し春に逢ふても柳は綠花は紅なり之れを無理から柳も花も同一の色にする必用はないのである。誠に之等をは生きたる教とも云ふへきてあろうと思ふ。

道元禪師か。北條時頼に與へられし歌に。こういふのがある『あら磯の波もるよせぬ高岩にかきもつくへきのりならはこそ』。

此の道元禪師といふ人は。五年の間支那に留學して。歸朝後建仁寺

や宇治の黄檗山に入り。後に永平寺に入り。終に其開祖となつた。大德である。扨て此の歌の意味を。一口に云へは。不立文字と云ふの外ないのである。和歌てふものは婦人文學で。壯嚴なる事は云ひ得ないと云ふか此の歌なとは實に莊嚴なものた。大磯や觀音崎さては鎌倉なとの海岸に彼の。勇壯な大波か打寄せて。大岩にブツカルが岩はビクともせず。其高さも高きもへ。波は屆かないから。牡礪か付く事か出來ない。それと同しく崇高なる此の法も。書き表はす事か出來ないと。云歌の心てある。實に此の間に法味油然として汲み盡す事か出來ないのてある。此の事は禪宗のみでない。眞宗も皆然りてある。大體禪宗の病とも云ふへきは。佛法の事はいふ事か出來ぬか。されは言ふ事か出來ないならは心理學的に思ふ事も出來まいと云へば。いやそうではない思ふ事は胸一杯なれとも。文字に顯はされないのたと云。そうすると此れは死佛教と云はねはならぬ思へは不思議なり。人間の言語は實に重寶なるものて。胸の分別は直ちに言語とか。文字に顯はし得るものなり。然るを言へぬと云ふのは。何故か思へないからてあろう。釋迦は五千餘卷の經を說けり。此れ大平洋の大波なり。禪家では之れをお釋迦樣の「ヘド」だとして居る而して其五千餘卷は。釋迦自身煙として死せり。之を一字不說と云へるなり。

佛法は不思議なり。佛法は吾人を極樂へやるか。地獄へやるかは知らさるなり。親鸞聖人は一切存知せずと云ひしに非らずや。此の事に一話を思出せり。予の少年時代に母より聞きしものなり。

去る處に兄弟あり。兄は其弟を愛せり。然るに其弟大病に臥したれは。兄の心配一方ならざりき。一日弟の山の芋を好む事を思出し。

色々に難儀苦勞をして。漸く之を得て與へ以て其心を嬉はしめたり其時弟の思ふには實に好き芋なり我にさへ斯く與へしものなれは。兄は定めしより多く美きやつを食せしならむと確信して。兄の寢る間を窺ひて。之を殺したるに其腹の中には。惡しき屑芋のみありしとぞ。

さあー此處だ如斯。高祖の腹中を解剖せなければならぬ。高祖の腹中定めて何かあたろうか。いざ解剖して其屑芋てさへもないのに。驚かなければならぬたろう。いや何一物もない事は明かである。誠に奇なり。實に不思議なり。然し不思議なるか故に。易なる譯であろう。實際佛法は思へさるものなり。成程と手をたゝきて合點するものてない。昔も今も之れを得むとして。如何なる難事をも。顧みさりし人は幾人もある。されは吾人なと之に對して大に奮發せなければはいけない。大に求道をやるへし。然し最も一言して置く事は釋迦も高祖も。眞に胸中は無一物である事である。それだから高祖も不思議〳〵と云はれたのである。全く思ふ事が出來ぬからなのである。

## 胎内教育と家庭教育

文學博士　村上專精師　講話

教育は實に人生に於て。最も必要のものであるが必要なる丈ありてこれを實行するに。最も困難なるものである。總べて人間の爲すことに易いことはない。皆六ヶ敷。併し教育家として論ずると。教育ほど六ヶ敷ものはない。充分な教育と云ふことは殆んど望めないほど。六ヶ敷ことである。その六ヶ敷ところを忍んで。これをやるはどうすればよいかと云ふに。教育の順序に注意せねばならぬ。教育

の順序と云ふは外でもない動もすると。教育と云ふことを。學校に限ることのように思ふ人がある。それは大なる間違である。學校に入るまでの順序として。是非とも經過せねばならぬのは胎内教育と。家庭教育とである。これが學校教育を受くるまでの順序である。この順序に依らねば學校教育を受くるも。好結果は見られぬと云ふが教育の規則である。即ち順序と云ふものである。

諸君農事に就きてこれを考へなさい。種を蒔き苗を植るには。地味地質を選ばねばならぬであらう。地質地味の如何は。植物の發育上至大の關係あると云ふことは疑はれぬ事實である。縱ひ地質地味がよくても。道路の如き乾ききつた處に種を下しても芽は生ぜぬ。堅まりきつた土の上に苗を植ゑても育つものでない。土も和らかで相當に潤ひもあり。また多少の肥しもある處でなくば發育せぬであろう。よし發育しても充分でない。善き植物は出來ぬものである。即ち美はしき花は咲かぬ。實が出來ても。善き實は結でぬものである。

植物がそうなら人類もまたそうである。總べて人の母親は。植物に取ての大地のやうなものである。そこで善き母親からは善い子が生れ。惡い母親からは惡い子が生れると云ふが。まづ一往の道理である。世の中には例外と云ふことがあつて。必ずそうとも申されぬ。時に依ると。親に似合ぬ子の生るゝことも。全くないのではないが多數は善い母親でなくば。善い子が生れぬ。瓜の蔓には瓜がなり。茄子の木に。茄子がなると云ふ道理は屹度あると申してよい。處が子として受くるところの遺傳に二筋ある。則ち肉と心との二筋である。善き體格の母親には。善き體格の子が生れる。また善き心の母親には。善き心の子が生れると云ふが普通の例である。父親の關係

も無論あるに相違ないが。父親よりも母親の方が直接である親密である。事實である。そこで母親たる者は。父親よりも子供の教育に就いて。責任が重いと云はねばならぬ。懷姙以後。母親たる者の精神の持ちやう身體の働きやう。言語の使いやうが。皆胎内の子の出産以後に於ける教育に關係するのである。則ちこれが教育の初めである根底である。第一着である。依てこれを胎内教育と申すことである。この事は古人も注意して置いた。則ち支那の「列女傳」と云ふ書物の中に。左の如く示してある。

古へは。婦人子を姙めば。寢るに側たず。坐するに邊よらず。立つに蹕ひせず。邪味を食はず。割正しからざれば食はず。席正しからざれば坐せず。目に邪色を視ず。耳に淫聲を聽かず。夜は瞽をして詩を誦し。正事を道はしむ此の如くすれば。則ち生るゝ子形容端正にして。才德人を過ぐ。





實に子として母の胎内にあること。凡そ四十週間この間は胎兒の身心を創造する時代である。依てこの間に於ける母親の注意は最も大切である。併し懷姙してから俄かに注意しても駄目である。平常から人の母たるべき器となつて居ねばならぬことである。平常人の母たるべき器にあらざる者が。姙娠したからと云ふて。俄かにそうなれるものでない。またよしそうなることが出來ても。その功能は薄いことである。そこで健全なる人物。健全なる國民を造るには。善き母親を求めねばならぬ。善き母親を得んとするには。女子教育を盛んにせねばならぬ。今回戰爭後の經營として。日本の國是をきめんとするに。その根本は教育である。その教育を盛んにするに就き胎内教育の點より考ふれば。男子の教育よりも寧ろ女子の教育か急

務であると謂はねばならぬことである。

更に農事に就きてこれを考ふるに。稻を作るには。稻の苗の生育が大事である茄子を作くるには。茄子の苗の生育が大事である。菊を植へ。朝顔を栽へるにも苗を吟味せねばならぬ。苗の善惡は栽へた後の結果に影響すること至つて大なるものである。そこで胎内教育が必要であると共に。家庭教育の必要なる所以を考へねばならぬ。胎内教育の必要は種を吟味することの必要と同じである。家庭教育の必要は苗を撰擇することの必要と同じである。

凡そ人は學校に入るまで。たとひ學校に入てからでも初め三四年間と云ふものは。學校の教育よりも家庭教育の方に重きを置くべきである。而して成長後と違ひ兒童の時代。則ち出產以後約十年間と云ふものは。全く注入的教育に依て成長するものである。教育と云ふ





でも。學校のやうに規則だちて教授すると云ふのではない。されど一家族の中に於ける日々夜々の風儀及び言行の如き。百般の事柄が小兒の耳目に觸れて。自然の間に注入的教育となるのである。そこで家の風儀がよろしければ。自然の間に子供の風儀が善くなつて來る。若し家の風儀がよろしからぬと。自然の間に子供の風儀も惡うなつて來る。父母の言行が賤しければ。兒童はこれを看做ふて。賤しき言行の者となり。父母の言行が貴とければ。兒童はこれを學び知らず識らずの間に。貴とき品格ある言行者となりて來るは。眞に動かすべからざる事實である。而して諺ざに。「三つ子のこゝろ百まで」と云ふやうに幼稚の時代の習慣は一生涯止まぬものである。實に生後十年間。家庭に於ける自然の教育は殆んど人生一代の品格を造ると云ふてもよい。こゝに於て家庭教育が。人生に於て如何に

必要のものであるかと云ふことを。能く考察せねばならぬことである。

しかのみならず。人と動物とを比較するに。動物は他の教育を待たずして。本能を自發する言である。然るに人はこれと違ひ。本能的分子は少く。他の教育に因りて知るのである。自發のものは。洵に少ない。汲ふこと。舐ること。噬むこと。鳴くことの。四種位である。其他の一擧一動は。他の教育に依て得る所の結果である。例へば人に逢へば頭をたれて禮をなすのも。皆自發でない。他に教へられて飼養のも。教へられて飼養のである。立つもの。教へられて立つのである。歩むのも。教へられて歩むのである。箸を握るのも教へを受けて握るのである。御父樣。御母樣の名詞も。教へられて發するのである。手を合せて佛けを拜み。或は神に詣で丶手を拍ち。或



れて後。この事を爲すのである。而してこれ等の教育は。學校に入ってからのことでない。家に在る時卽ち家庭の教育である。そうしてこの幼稚の時の教育が。人の一生の品格に關することを見れば。家庭の教育が如何に必要のものであるかと云ふことを能く考察せねばならぬのである。

さてこの家庭の中に於て。學校で云ふなら主任教授とか。教頭さんとか云ふやうに。兒童教育の衝に當れる者は誰れであらうか。若し男女を以てこれを分たは。女子である。父母に就きてこれを云はゝ母方である。男子は多く外出して。家に居ることが稀れなると共に小兒とは緣の薄き者である。女子はたとひ母にあらざるも。兒童には至つて緣の深い者である。殊に母としては。晝夜兒と相離るゝことはない。たとひ外出しても。母と兒は相離れぬものである。小兒

は十中の八九分は。父方に離れて。母方につきそふて居るものである。隨つて人生一期の品性に關する小兒時代の家庭教育は。その責任者を問へは。男子にあらずして。女子であると云はなくてはならぬのである。

しかのみならず。家庭と云ふものは。男子が造くるか女子が造くるかといへば。女子がこれを造くるのである。形式は男子のやうに見へて。その實力は女子である。女子は家庭の中心である。女子は家庭の羅針盤である。女子にして善良なれば。その家庭は。必ず善良である。女子にして善良ならざる所あればこの家庭は屹度美しからぬものである。女子は實に家を齊ふる無形の武器である。諸君は「家齊ふて而して後國治まり。國治まりて而して後天下平なり」と云ふことを聞かれましたか。此は支那孔夫子の說なるも。幾千年後の今日に至り。何人も否とすることの出來ぬ確言である。是れに由て之を觀るに。世界の平和も家を齊うのが。根本である。國力の振張も。家を治むるのが根本である。大戰以後の經營も。家を美しくするのが根本である。そうしてその家を齊うる主役人は。男子にあらずして女子である。則ち家庭の委任者は婦人である。」して見ると。將來の子孫に對してこれを考ふるも。女子の責任は重大である。現在の國家及び社會に對してこれを考ふるも。女子の任務は重大である。女子たる者は。自身の任務の斯く重大なることを。よく記憶すべきである。また男子たる者は。女子の責任の斯く重大なるを承知して。舊習になづます。進んで女子の教育に盡力すべきである。胎內教育であれまた家庭教育であれ。男子の力は一二分で女子の力が八分も九分もあることして見れば。男子の教育が必要なるは。辭を待

たぬことであるが。男子教育が必要なるに就いても。いよ〳〵以て女子の教育を引立てねばならぬことである。思ふに戰爭以前の日本と異なり。戰爭後の日本はいよ〳〵多忙である。今また歐洲强國の眼中には。吾々が南洋の小孤島を見るが如くなりしこの日本が。今後世界最强國の地位を占むることになるとすれば。戰後の經營は眞に多忙である。而して戰後經營の基礎は實に女子教育なるものである。私しは之を決して過言ではないと思ふことである。

## 世を渡るの道

加藤咄堂居士　演說

如何にして世渡りをすべきかと云ふことに就ては。先づ心に浮ぶものは金錢である。しかし。人間は金錢ばかりではいけない。道德と云ふものがあつて始めて人間の人間たる價値を有するものでありま





す。所が。古來。此道德と金錢とに就ては。金錢を得んとする者は不道德家であるとのみ考へて。結局此の兩者は兩立しないやうな考へを有して居ります。此は。成程昔の道德家とも云はれる人はそうでありました。何時も道德家として標本に引出さるゝ顏回の如き。極めて貧乏であつて志の高いのを道德家ごしまして。金錢を澤山にためるものは全く道德に反し。道德を知らざるものゝやうに思ふて居つた樣であります。此に就て面白い話があります。昔。大槻磐溪と云ふ人がありました。此の人の友達に壬生玄碩と云ふ人が居りまして非常な金滿家でありました。或る時大槻先生がその人に尋ねまするのに。お前はどうしてそんなに金を澤山蓄めましたと云ふと。玄碩此に答へて云ふやう我が家には一子相傳の法がありますそれによつて斯樣に金を蓄めたのである然らば其法を教へて下さるまいか

此の法は他人に教ゆることは出來ません然し貴方のことであります
から。若し七日の間齋戒沐浴して來たならば教へてあげませうと云
ふので大槻磐溪も七日の間齋戒沐浴して玄碩の處に行きますること玄
碩の答に。金を蓄めるの秘法は別のことではない仁義禮智等である
が若し金を蓄めやうとしたならば此等のことを考へては蓄まるもの
でないと云ふたと云ふことである。此れはホンの一の謔戯でありま
するが古の人が如何に金錢と道德とが全然相反對するものゝやうに
考へたかと云ふ一例とも見るべきであります。又伊達政宗が昔し
黄金を諸侯の列席せる人々に見せられました時皆な各々手に取りて
美を愛賞せられました。處が直江兼續と云ふ人のみは手に取らずし
て團扇の上に受けて見ましたすると手に取りて能く見よとの仰せで
ありました時。兼續は手に取れば手が汚れますと云ふたと云ふこと



であるがこれも金錢は汚れたものであると考へた武士の氣風を見る
ことが出來ます。然し金錢と云ふものは果して斯く汚はしきものて
あらうか。凡そ此の世に大事業をなし。世を救ひ民を濟はんとする
には金錢がなくては出來ない然るに此の金錢を卑しみ。金錢に近か
ざるを以て道德となして居るは大なる間違つた考へと云はねばなら
ぬ尤も金錢に萬能力を與へ金錢さへあればどんな事でも出來るもの
であると思ふはまた一つの迷見と云はなければならぬ。古代アッシ
リヤの王樣にミダスと云ふ人があつた。この人は神樣に祈つて目に
見る所のもの。手に觸るゝ所のもの皆な悉く黄金となるやうにと願
望致しました所が。神樣は此の願を許しました故ミダス王は大變喜
びまして家に歸つて見ると願の如く其家は皆黄金となり。食はんと
欲してこれを擧ぐれば食器皆な黄金。渴して飲まんと欲すれば水迄

も黄金となり果てた。斯樣に四方上下皆な黄金づくめで黄金裡に居りますが。食ふにも飲まんとするにも皆な黄金であるによつて終に饑渇に逼り。こうゝ神樣に其願を取消したと云ふ。これは一つの古譚に過ぎませんけれども金錢に萬能力を附せんとする人の大いに反省すべきことであらうと思ひます。

近來世の人か成功々々と云ひますが。其多くは金錢を澤山にこしらへると云ふが成功であると思ふて居る。これが果して成功でありませうか。若し成功てあるとすれば一種の黄金中毒であつて眞正の成功と稱することは出來ない。また此の成功と云ふことに引きつれて修養修養と云ひまするが。修養とは金錢を退けて道德を守るのが修養であるかの如く考へて。而して世に遠かり總ての誘惑物を避けるのを以て此が眞正の修養であると思ふて居る樣であるが。これ等は





社會の死物であつて。決して眞正の修養は得て望まれないことである。兎角昔の道德は制慾主義に傾き。黄金前に山なすも其節を變ぜざる人が世に處して活動をなすのを眞の道德家であるとすることを忘れて居る。無闇に金錢に遠かり。女に遠かり。而して僅かに精神の平靜を得るを以て眞正の修養の出來たるものゝ如く考へて居つたが。此等は決して眞正に修養の出來たものと云ふことは出來ない無住和尚の沙石集の中に斯う云ふことがあります。和尚何時でも小僧を戒めて云ふに。女は虎のやうなものである恐ろしいものである。出家たるものは成るべくこれを見ないやうにせねばならぬと敎へて居つたすると。或時のこと和尚は小僧を伴にして村に出掛けると盛粧せる一人の娘が向ふの方より來ると。小僧忽ち和尚に問ふたあれは何んでありまするか。あれは常に云ふて敎へた虎の如き女である

と。其後小僧は寺に歸つて何時も何時も虎が見たい虎か見たいと云ふたと云ふ話があるが。斯く遠ざけて見ざるやうにして僅かに心の平靜を保たうとすると斯う云ふ樣になるのであります。大燈國師と云ふ人の歌に

坐禪せば四條五條の橋の上往き來の人をみやま木に見て。

と。山中でなければ坐禪が出來ないと云ふは眞正の坐禪眞正の修養と云ふことは出來ない。頻繁なる京都の橋の上でありますから雜踏一方ではない。立派な美人も通れば甘い香ひもする其中に泰然として枯木の如く坐禪するやうにならなければ眞正の修養と稱することは出來ない。然し或る人は此を評してまだ此れでは修養が足らない眞實の修養は

坐禪せば四條五條の橋の上往き來のひとを其儘に見て。



即ち往き來のひとをみ山木に見るの必要はない。其儘に見て精神の眩惑されないやうになつて始めて眞正の修養が出來たと云ふものである。抑も修養とは一體どんなものでありませうか。

凡そこの世のものは皆な相對的でありまして。苦あれば樂あり。喜びあれば悲しみあり。成功を以て此の相對上にて出來あがるものであると心得るは大なる間違と云はねばならぬ。これ以上に高尙雄大なる大成功がなければならぬ。例せは金錢を蓄める人が一萬圓畜めたならばそれで充分滿足せやうと思ふたならば其後は決して進歩も發達もせない。それ故に尙ほこの上十萬圓百萬圓。岩崎や。三井の樣にならうとする心を以て進歩せなければならぬ。よし又た岩崎や三井のやうに大財産家大金滿家になつても。それで足れりとしてはならぬ。彼等はまだ日本の財産家金滿家ではあるけれども。モルガ

ンや。カーチーギーの如き世界の財産家世界の金満家ではない。これ等に比較すると岩崎や三井などは實に微々たものである。それであるから。モルガンや。カーチーギーのやうな世界の大財産家にならうと云ふ心を持つによりて進歩もあり。發達もあるのであります然しモルガンや。カーチーギーが大財産家。大金満家であるとするも。まだ彼等は世界の富を悉く自巳のものにする。世界の所有を巳れの所有とし たものとは云へない。世界の富。三界の所有を巳れの所有とせんとするには。絶對無限の處に心を置かねばならぬ。そうするには其志は頗る高崇に。其行動は頗る質實でなければならぬ。これでよい。あれで満足だと思ふより强者の心も生じ。不道德の行爲も生ずるのであります。一たび心を向上の一路に向け。絶對無限の處に置けば。相對的差別的の考をさり。凡て一視同仁の處迄行くべきであります。この絶對無限の處に心を置き。眼を着けるのが眞正なる修養の基礎であり。眞正の修養の主眼であります。然らばそれは如何にしたならば可いかと云ふに。此の世に苦あり樂あるけれども。それ等の苦や樂に心を動かされない樣にして。苦樂以上に自巳の心を置くにあるのであります前には金持の例を引きましたが。凡ての人々が種々な職に對して。これで成功したとか。これで満足したとか思ふならば其は既に將來進歩もせず發達もせない。進歩發達は最早や止つてしまうのである。然るに一歩踏み出して心を百尺竿頭に着けるならで志氣崇高なる人となるのであります。心を一歩上につけると云ふても他と比較的ではいけない。世界一切の最も上なる絶對無限の處に心を着けなければならぬ。其時は最早や他のために心を動亂せられると云ふ憂はない。寧ろ自分の方より他の一切

を支配すると云ふ境界である。

この絶對無限の境界とは一體何んであらうか。吾々は此を名けて佛と云ふのであります。されば佛は三界皆な我が有なりと宣ひ。或は三界の衆生皆な我が子なりとも召せられてあります。斯かる崇高なる幽邃なる絶對無限の佛の境界に心を着くれば。これより一切の同情心は湧くが如く起り。奮勉の念禁ずる能はざるに至る力であります。心をかやうな處に置くのが眞正の修養でありまして。心を此處に置きて進むのが此の世に處する唯一の秘訣であります。

世の人の多くを見渡しまするに。大概の人は相對差別の上に心を着けて居る。それでありまするから。不滿足の念が生する。不滿足が生するによつて種々な懊惱苦悶が生ずる。不道德心も起る。法律の罪人ともなる此に反して心を向上の一路に向けると。只これ人の嘲





けり詈しるに任せ已れの向ふべき所に向ふ。人我れを詈らば罵れ人は人我れは我。我何ぞ他に關せんと云ふさり乍ら心泰山の如く。眞實なる精神の修養をなすことが出來るのであります。人我れを詈ると雖も我一毫も關せず。人我を賞むると雖も我また一毫を加へん此に於いて其の志す所に着々進むことが出來るのであります。白隱禪師と云ふ方が相撲の國に御任まいなさる時分其寺の門前に豆腐屋がありました。其家の主が非常に禪師に歸依しまして居た處が。其家に一人の娘がありまして何時の間にやら情夫と親しき間となりて終に懷姙致しました。主は大に驚きまして色々と正しまするとこ。娘は眞實の情夫の名を語れは必ず怒られるならんと思ふて。實は白隱樣の種を宿しましたので御座いますと云ふた。所が主は大に怒りまして。白隱禪師は今迄は實に高德な方とばかり思つて居つた故御歸

依を申上げて居つたが我が娘を斯く爲すことは落墮極つた坊主であると云ふて。其子の産れるのを待つて居るうち愈々出産しましたものであるから。主は其産れ子を抱へて禪師の處に行き。この子は貴方の子でありますからどうなさることも勝手に御そだてなさいと云ふて其子を禪師の處に捨て置いて歸つた。すると禪師は少しも騷がれず其子を大切に抱きて毎日〳〵所々方々に乳を乞ひにあるかれた。すると此の事が近所近邊の評判となつて世の人々は白隱こそは墮落僧等の見せしめであると云ふて笑ふて居るも禪師は少しも意とせない斯うして一二ヶ月も經過しまする中。其娘の實際の情夫が發覺しました所が。其家の主は大いに驚きまして取り敢へず禪師の處に詫に行き。特に言葉を卑下しまして自已等の惡いことを述べますると。禪師は少しも怒らないたゞ「ハーそうか」と云ふて其子を渡された



と云ふことであります。この消息實に面上春風の吹くが如く。太平洋上洋々たるが如き心地がするではありませんか。

斯くしてこそ眞の修養が成つたのであると云ふべきであります。若し此の時に禪師が自分で姙まましたのではないと云ふたら。さぞかし他人を損ずるであらうと思ひ。自已が如何に他にそしらるゝも一毫も關せんと云ふ大慈悲心。大不動の心は。彼の金錢を退け。女を遠ざけ。浮世を遠ざけて僅かに修養を得たりとするものゝ比ではないのであります。この修養の功が積みてこそ眞に浮世に大成功をしたと云ふことが出來るのであります。金錢は決して卑しむべきものではありませんこれを使用して社會公衆のため大慈善をなさなければなりません。世間の人々が從事致して居りまする事業は各々別々であり。從つて其の向ふ所も別々でありまするが。心を絶對無限の處

につけ佛を理想として進んだならば此の世に生活する上に就て少しも動着すべきものなく。苦樂喜憂にもまた心を存ぜずして。眞の成功者となることが出來るのであります。これが世を渡るに尤も善き道であらうと思ふのであります。

世の中の人々が道德と金錢とを別々に思ふけれども。不義の富貴は浮べる雲の如くでありまして。眞實の修養なき成功は空中に畫ける樓閣の如くであります。此れで御功したと思ふても直ちに破れる一口に修養と云ふても此の浮世をば實際に渡るに役にたゝなければ眞の修養と云ふことは出來ません。私は信ずる。眞正なる道德は眞實の利益に決して相離るべきものではない又た眞實の利益は決して眞の道德と離れないものであると。而してこの中間の所が眞理の存する所であると云はねばなりません。



## 信仰の本源

【死刑囚　清水安次郎の信仰】

文學士　近角常觀師談

人の信仰を促すは。微頭徹尾自巳が實驗の信仰談をするに限る。自巳の實驗は根底で自巳に對する人卽ち自巳に因りて起さるゝ他人の信仰は其根底に生ずるのであるから。自巳に根底なくして徒らに他人の獲信を責むるは無理である。

人に信仰を得させんとするは必要なる發願であるが。是に就て夫よりも必要なのが自巳の懺悔と實驗談と信仰の告白である。人の得信の督促する思念力は到底自巳の懺悔實驗告白の力に及ばぬ。故に此際には斯かる思念を腦底より捨離して掛らねばならぬ。如斯にして自巳の懺悔や實驗や苦悶やを告白し。傍ら祖師先德の實驗を引證して求道者の頭腦に注入したる以上は。強て小刀細工を弄せず其人其

者の自然に發動し來る。佛智の活動を待つ外はないのである。若し此期間内に於て氣を喘せりて其人の得信を促すこも。此方の注文通りに信心獲得したる例は殆んど絶無である。然るに機緣成熟の輩卽ち佛智活動の期間に入れる人物に對して何心なく一言片語の法話を試みんか。彼は忽ち決河の勢を以て偉大にして猛烈なる信仰を現すことがある。斯かる事實に接到する時は。彼に何故に我がこの一言片語の法話によりて。是程の大威力を發現したかを疑ふ場合がある其一例を擧ぐれば死刑の宣告を受けたる囚人に向つて。非常の努力を以て教誨するも。其反應こして更らに見るべきものなきことあるに反し。他の一人は僅々一回の法話を聽きて驚く可き決定心を獲たるもあり。清水安次郎こ呼ぶ囚人も死刑の宣告を受けたる一人なるが。彼れは何時の程に信仰界に入りしを知らずこ雖も其信仰の堅實



なる殆んご想像の外に在り去れば彼が屠所の羊に等しき運命を抱き居る身の上なるにも關らず。其就業の眞卒なる是亦囚徒こして受取られぬ程である。元來囚人の常こして最も愛重するは食物である。囚徒社會が監獄内に於ける欲望こ謂へば實に此外には無一物こ謂つても宜しき程である。然るに此清水安次郎に至つては此食物中一片の香の物の上にまで信光を輝かして居る。

或日の事なりし典獄某は。此死刑囚清水安次郎に對して一片の香の物を與へるに如何なる間違にや彼は一片の筈の副食物を二片得たのである。處が普通の囚人なりせば必ず之を無言に付して喰つて仕舞う筈であるが。彼れ安次郎は其配付の過失を發見すこ共に。直に是を獄吏に返還したのである。此の如きは無論普通の囚人にも稀なる處である上に。身は死刑の宣告を受けて朝露に等しきものなれば

猶更ら娑婆の暇乞に得たり賢こしで是を喰つて仕舞うが當然なるにも拘らず此の殊勝の事を爲すにぞ。流石の典獄は直ちに茲に不審を立て、彼か所存の程を聽き糺した相な。處で彼の曰くには。御役人樣私は阿彌陀樣より澤山なる御慈悲を頂戴して居ますから。昔の樣に食物の事を念ひませぬから。おナカもスキませぬ。御役人樣私は三度戴く御膳の外に。夜も晝もアナタの御慈悲を戴き詰に戴いて居りますから。空腹も感せねば一片の香の物を貪る氣も起りませぬ」と。斯く答へて滿身の信光より其一線を洩した相な。夫れのみならず彼は囚人に能く骨惜しみと云ふ惡僻なきのみならず。一月の元旦までも休業せず定職の經木を組んで居ると云ふ事であるが。彼は決して是に因りて典獄や其他吏員の歡心を迎へんとする痕跡なく。只管佛陀の攝取を信賴して。其御恩報じの爲め斯かる行迹を示して居る樣子である。

然るに此の清水安次郎なるものは。自分常觀が法話を與へて教誨をして囚人に相違なきも去りとて此の堅實なる信仰を自分か附與したとは考へられぬ。自分の教化と彼の獲信と比較して。自分はトーしても心當りこする節かない。デ。詰り此等を佛陀の御催しと信ずる外はない。佛の催は卽ち佛智の活動である。佛智の活動は。卽ち人智以上の力であるから布教傳道卽ち他人に信を起さす道は人力の小刀細工を拋棄して佛陀の力を賴みにする外がない。斯かる決心を以て遣る時は始終捲厭の惰情起らず。愉快に充されて働く事か出來る此決心と活動ある人には佛の方よりして昨日も一人今日も一人と。懺悔告白の人を與へて下さる樣になる。既に斯く成り來れば其愉快さ加減は終に人間の言葉では形容の出來ぬ位である。然れども是れ

は信仰發動の本源が佛の御催に在ると云ふを悟了した以上の消息であるから。此境界に到着せぬ人では此快味は玩味し得られぬのである。而して所謂本源の本源を悟るには。矢張り自已に信仰の實驗ありて。佛の慈光を浴びざれは望んで得べからずであるから。歸する處は。自信教人信とも佛智不思議の御催に在るを信ずべきである云々。

## 丙午の迷信

（京都市議事堂に於ける）

文學博士　井上圓了師　演說

私は二十年間獨立で教育をやりまして。人間僅か五十年と申ますから。先づ半生の仕事でありますから他の者へ讓りました。私は遠から早晩大學に致した。いと自ら誓つた如くに兩三年前に大學となしました。故に過半の希望は既に達した事と思ひます。私は九歲の時分より二十年間の教育を受け。其後復た二十年間は社會に盡しましたから。丁度相償ふたのであると思ひます。今回は私が別に爲んとする事業は修身教會でして。初めに大和地方へ向けて出掛けたのです。

「丙午の迷信」といふ演題は當發起者が勝手に撰定せられたので。私は來着迄一向に知らずで在つて。來て演題撰定の報告を得て只今承知しましたので。充分な考が素よりないのです。其邊はよろしく豫め御斷を申上て置きます。

京都の人々は丙午の年に當れは火災が澤山あるとて非常に恐慌して居るそうですが。恐慌狼狽すれば京都全市は悉く燒けます。又丙午汝ち何物ぞと大勇氣を出だして恐慌せず沈着して居れば決して燒けるものでありませんから。恐れると恐れざると燒けると燒けざると

ごちらなりと諸君の御撰びに任せて置きます。丙午は大體支那傳來でありまして。丙とは十干中の火の性を云ひ午とは十二支中の火の性を云ひますので。五行に陰陽の二つを區別して天（陽）にあるを干とし地（陰）にあるを支と爲す。丙は兄なれば陽である。十二支中巳午の二つは火であるが。其火に剛柔二つの別がありて。午は火の剛なるものである。時間に取つては十二時なり。方角に當つれば南方である。支那にもつまらなひ俗書に丙午には災難ありと書ひてありますが。實は日本支那にも其謂れは更に見とめ得ないでありまし……。未だ形ちを爲さぬのを十干と爲し既に形と成つたのを十二支と爲たので。五行其物は何ものぞとなれば木火土金水である。此說は孔子時代になかつたのですが。周末よりそろ〳〵と斯る俗說が起り出して秦漢等に至ては迷信の最も跋扈したのです。タカヲ不老



不死の藥を探がしに使者を出したに徵しても明かであります。支那では萬物は五行より生じて……畢竟萬物は五行であると思つたのですが。唯今では原素は何に〳〵で。何んの働きが卽ち其功用の分限に至る迄理化學を學んだ者は能く知つて居ます。これらのことは支那よりは却て印度の方が餘程進歩して居ました。印度には地水火風空の五大と云つて。物の性質の方から推窮したから。地は固形性。水は濕性。火は溫煖性。風は運動性等。としたが支那の五行には風もなければ。空氣もなし然るに之に木を入れたのが變である。木は原素でなひことは言ふを待たぬことである。五行がらして五行の生尅禍福吉凶を云ふのです。五行に相生相尅を立て丶。私が水の性とすれば。火性の人とは衝突するから相尅するので凶である。金と水固とは相生なれは吉と言ふのです。其處で金生水……金が水を生ず

る證明には。今此處に金山があつて之を掘れば必ず水が生ずるが故に。金は水を生ずこしてありますが。掘つて水の出るのは金山計りでなく。何れの地を掘るも掘れば必ず水が生ずるから。金生水よりは却て土生水といふた方が善びです。又の證明に金製の納水器には水蒸瀛が滴るを見て。金は水を生ずることあります。木は火を生ずるとあつて木を燒けば火になるから木より火の發するは見やすき道理なるが。火は木計りより燃へるでなく。油は水なれど火を生ずれば。水能く火を生ずるので。水火相尅水火の戰ひであるから大凶だのといふ理由なく。水が火を生ずれば水生火の相生にして吉ではなひか。斯ることを迷信するのは實に愚物であります。

方角では南方は熱き故に火と爲すといふが。五行說の書物には赤道以南は之を奈何に爲すべきや。南方の熱ひのは赤道以北にして。赤道以南は南方が涼しくなる。昔は時間を夜半より算へたるによつて十二時が午となつたのであるが。現今では一時より計算するから午前午後とも何れも七時なれば。至て清涼なる午の刻であります。それは古今混同することは出來ぬと苦情を鳴らすかなれども。畢竟人が勝手に極めたものであれば。昔の時計を套守する必要はない。今は今の時計で善ひ譯だ。實に五行やナナニ支などは無意味の甚しきもので。支那でも下等の愚人が信用するまでゝ。教育のある上等の者は信用せぬ位です。こんなことは印度にも西洋にもありません誠にはや五行干支を迷信するのは。大きく云へば各國へ對しても國辱ではありませぬか。

# 安慰

（青年會に於て）

赤松連城師　演說

安慰とは安も慰もやすんずると云ふ字で精神の安慰よりして考へたる演題です。安慰とは必ず一方に不安があればこそ出て來たことであります。宗教上には人に安慰を與ふるもので。一切の懼々に大安とて諸所に懼れに對して大安樂である。之を曇鸞大師は佛に大安慰と異名をつけられましたが。人生は實に不安と不平の固結であります。來會諸君中に此發會式の芽出度時に斯かる不吉を云ふと仰せらるゝかなれど。此不平不安が全くなければ宗教も此青年會もいらぬものである。或る博士の大先生が宗教は人の弱點に乘ずるものなりと定義を下だしたですから。衲は早稻田で之に對して僅かに一轉語を下だしたのがありますが。博士の弱點に乘ずると云ふ方では宗教は厄病神の如く弱身につけこむ樣に聞こへますが。宗教は決して左樣ではない。衲の一轉語は。宗教は人の弱點を救ふものなりでありました。醫藥は人の病氣に乘ずるものなりと言へば乘はつけこむ事だから俗諺に。橙が黃色くなれば醫者が青く成ると一班だ。これでは人の喜びを憂ふるので博愛仁術の醫者も厄病神同樣の營業となります。そんな者が多くの中には一二人はあるかも知れませんが。先づない筈です。醫者の本分としては如何と云ふに。醫藥は人の病を救ふものなり若し病なくんば止みなんだ。佛教には應病與藥と談じまして病に應じて藥を與ふるに譬へてあります。人の身體に病があれば必ず不安でありますから醫者が之を治ほすのであります。不平の中にも亦いろ〳〵ありますが同じ世界に生れましても。俗に上見りやきりなしと云ふ事とありまして。下を見ますれば不平が起りま

すから。上を見てくらせと云ふ教訓が出て來ます。下たを見たら滿足することが出來ますかもしれませんなれど。兎角儘ならぬ憂き世で思ふ樣にならず。不如意の結果が心に不平が起りまして。其因て來る處を知らずであります。不安とは唯今はこれで善いけれども將來はいかゞと。身分財產一切の事を我れも考へ人にも問ふて見ても確守不動と受合ふわけにはまいらぬ。誠に便りないから必ず不安が生じます。實に人生は現在には不平……未來には不安此二つが離れません。現在の運命卽ちまわりあはせと爲し。又は天命とし命なるかな天なるかなと諦らめ。一方は天道人を殺さずと順境の者は云ふけれど。又一方逆境の者は天道樣もきこへませぬ……天道は是か非かと云ふのです。親の嚴命で嫌やな妻を持つた如く。何事にでも天の親にもきこへませぬとやるのです。安慰の慰とは心を尉するので尉は安と同じ意で又熨と同一であります尉は火熨斗でありますから切れ類の平かならざるのを「のす」ので。其如く心の波の起つたのをのすので之を慰むると云ひます。然かれば軍人の大尉も人をのすのかと云はるゝならん。これは人をたゞすといふ事に成りますが。然かし露兵の如く暴を以て來れば之をのすのであります。佛教では如何に談ずるかといふに。人生の苦樂は外より來たもうでは。決してない。自業自得の然らしむる處の過去の因緣である今生の果を知んと欲すれば。必ず過去の因に由る。今日の頭痛は昨日の大酒にあり。故に天をも恨みず人をも咎めずであります。戰死者の遺族が他の凱旋者を見ては。吾が子を思ひ出しては悲歎に沈む之を實見しては氣の毒で耐へられぬ。戰死者追弔法會の時には澤山御目にかゝり慰め樣に困るのです。例へば名譽の戰死で結構ですと云へば。凱旋

者も無事で名譽でありますと思ふ。戰死者は靖國神社に神に祭られますと云へば。無事で凱旋した者も金鵄勳章を賜はるでないかと難ぜらるゝ。コンな時はドーも慰め樣がないのです。此處で佛教では死ぬのは戰爭計でなひ……單にたゞ死んだ時は如何。何んの役にも立たず徒らに死ぬ者が多ひ其中で不朽の名譽ある最第一の戰死と比較は出來ませんと慰める。常平生にも誰れ彼れは澤山利益を得たに我れは損をして貧乏だと云ふ者には佛教の慰が人用である。未來の果を得んと欲すれば先づ今日因を積め。明日雨降んかと案ずれば今日雨具を用意すべしだ。曇鸞大師の大安慰を親鸞聖人は之を和らげて和讃におほせらるゝには「慈光はるかにかふむらしめ。光りのいたるところには法喜を得こそのべたまふ。大安慰を歸命せよ」と御座ります。此の安慰を得るが佛教信者一生涯の希望で。此の安慰を得て而して社會に臨むが。佛教信者の立ち場でありますと云々。

（於臺灣篤志看護婦會）

## 佛教と男女両性

島地默雷師演說

左は舊冬嶋地老師が臺灣篤志看護婦會卒業證書授與式に於て演說されたる中特に佛教に關する一節を筆記したるものなり、其前後に於ける宗教に關係なき所說を省きたるは老師及び讀者に謝する所なり。

（通信員）

（前畧）兎に角利益幸福を自他に廣く及ぶ樣にするが人たる者の本分で智德の両能を進めねはなりませぬ。之を要するに學校教育に於ても智育德育の二つがございまして。智育の究竟は德育にあるので智識がどれ程發達しても道德に伴はぬ智識は惡智惡學で何の益にも立ちませぬ。偖道德と云ふに付ても種々差別がありますが。近く剛柔二德と云ふ事が有て。卽之が全く寬嚴の別で。之を男女の両性に配當すれば男子は剛の德を有ち。女子は柔の德を有つと云ふ事は世

界の通論であります。佛教に於ても矢張同樣で女子を慈悲仁愛の表相としてあります。全體佛教上には餘程表象の事が多くあります。假令は佛樣や菩薩樣は蓮華の上に坐つて御座る常に蓮の上に坐つてござるは誠に妙な事であると思ふ人があるが。あれは物の表示と申しまして物によりて表德を顯すに便利なる仕方に因りて示しますので吾人凡夫の心相を表象致したならば餘程汚穢な物の上に坐つて居る卽汚ない心を以て坐つて居るのでありましよう宛も淤泥の如き有樣であります。所が佛菩薩は慈悲を以て體としてござるから蓮華と云ふ淸淨なる華の上に座つてござる。花は皆淸淨なれども殊に蓮華は格別で蓮華に何に生するかと申すと卽穢れたる淤泥の中より生じ亭々として抽んでゝ居りますが汚れたる中より出でも。少しも淤泥に染まず鮮かな花が咲いて居ります。斯の如く佛菩薩は世の中の汚れに交つて居つても夫れに汚れずに獨立してある事を汚泥に染まざる蓮に象取りて其淸らかなる所に座つてござる事を示して蓮華座を畫いた者でございます。斯樣に皆表象で示してある阿彌陀佛には觀音勢至の二菩薩が兩脇に附て御座る。其觀音は慈悲の方勢至は智慧の方であります。又釋迦牟尼佛の側には普賢文殊の二菩薩が立つてござる。普賢菩薩は象に乘り文殊菩薩は獅子に乘つて御座る。此普賢文殊の二菩薩は智慧と慈悲とを分掌して象や獅子の上に乘つて居らるゝは是は其受持の德を表彰したのでございます。卽文殊菩薩の受持は智德で普賢菩薩の受持は慈悲と云ふ事を表はしたものであります。獅子は百獸の王と申して强い獸でありますから其强い力で百獸の膽を威服せしむる所を智德に比したもので。すべての物に勝つのは智の力で、ある智慧の勝れたものが一番强いわけで。今日人事の

錯雜起伏したるものを程能く裁制するは皆智慧の力である。夫故如何なる强力も智慧に向つては刃對いは出來ぬ。此智慧の力を表はすに百獸の王たる獅子を以て其德を示し。文殊菩薩を獅子の上に乘せて此菩薩は智慧を受持れる事を表はした物であります。又普賢菩薩は慈悲を受持てこざる象と云ふ獸は頗る大きなものであるが最も柔らかなる德を有つて居ります。道を歩く時にても子供抔が居れば鼻を以て卷き脇の方に寄せ妨けにならぬ樣にして通行するといふやうな彼の大きなる體に似合はない優しい所の德を有て居るのでございます。夫で普賢菩薩の乘物は慈悲を表はす爲めに象を以てしたのであります。觀音勢至の二菩薩も同樣の事で觀音の三十三身は種々に身を現じて應病與藥の德を表はしてあるのでございます。卽如何なる場合に於ても間に合ふ樣に利益を授けると云ふ所から種々の形を



顯はしてある。是等は皆夫々其德を表象するのである。所が世の中に於て最も優しい形を持て居らるゝ御婦人方である故に佛菩薩の大慈悲を表象するには御婦人の形か一番よく適當致して居ます。夫故に畵工が菩薩を畵きますに文殊なり普賢なり觀世音なり皆艶麗たる所の婦人に寄せて畵いてあります。此文殊普賢の如きは實は表德と申して只德を象に示して見せた者であります。殊に歷史に於て龍樹菩薩或は天親菩薩など申すのは實際世の中に出て生活せられたのでございますが。其れが菩薩と稱せられてあるは菩薩とは畧語で具さに云へは菩提薩埵といはねはなりませぬ。菩提薩埵とは菩提は佛道と云ふ事。埵薩は衆生と云ふ事。卽上は佛道を求め下は衆生を救ふと云ふ事を菩提薩埵といふ。夫を畧して菩薩と云ふので此菩薩といはるゝ人は上は佛道を求め下は衆生を濟度すると云ふ事で正し

き道を求めて自らを利益するのみならす他の者を利益し自利々他を備へたと云ふが菩薩と云ふ名でありまする。ソコデ龍樹天親は此自利々他が十分出來る人であるから菩薩と名けられたが。此人は天竺で立派な男子で現に奈良の寶庫中にある佛菩薩の形象中に龍樹菩薩の像がありますが夫は恐るべき威嚴ある姿であります。卽印度の怖はこしたる男子である。印度の人は總て印度ヨウロペアン中で同じく高加索人種に屬し熱帶地方で色の黑い恐るべき怖はこした形ちでございます。（人種は歐羅巴人と同種）其怖はこしたる龍樹天親の姿を我が眞宗にては七高僧と申して龍樹。天親（印度）。曇鸞。道綽。善導（漢土）。源信。源空（本朝）七高僧を選んで相承の祖師と崇め其七高僧の像を畫ひて之を尊とむ事であります。然るに此高僧の中の始めの二祖龍樹天親は前にも申した通り男子の大學者で。



邪見なる外道を論破して大乘の佛敎を弘通せられは大學者であるに此二菩薩の像は寶冠瓔珞を戴いた優しい婦人の姿を以て畫き表してある。これはどう云ふ譯かと云ふに外の意味ではない全く菩薩の德を畫き顯はしたもので。菩薩は物を憫れみ衆生を濟度する事を任務とすることを表はしたもので。他の形狀を以ては此內德をば表はされない故御婦人方の優しい姿を以て表はすより外に慈悲の意味は表はしやうかない「馬蹄香はし」と云ふ句意を書き表はすには外の物では表はされない。馬の足跡に水か溜つて居る。其水を蝶が吸ふて居る有樣を畫たので馬蹄に香氣のある事が分る。或は馬の蹄を蝶か追懸けて居るので蹄に花の香のあるといふ事が判る。香は無形の者であるから之を畫き表はすには物に依らなければ出來ませぬ。如此わけであるから無形の心相。心の哀れみを表はすには婦人の形を以

てせされは哀れみを表はすことが出來ませぬ。ソコデ菩薩を畫くには御婦人方の形を畫いたのでございます。婦人の形は全く菩薩慈悲の面相を畫き顯はす繪手本で御婦人は形の上から物を憫れみ世を救ふと云ふ天禀を美しく表はして生れ出てござる譯でございます。

して見ますれは最も皆樣が此看護慈愛の事業を成される事は他の者の及ふ事の出來ぬほどの責任が有つてお出なさることゝ思ひます。

總て御婦人方の事に付て佛教の所談を世人が多く心得誤つて居る事が甚だ多くあります。其誤解と云ふは佛教は殊の多婦人を惡しく云ひ。女子を虐待せしむる抔と云ふ此難がありますが。是は佛教の所說を委敷取調べない皮相の見。膚淺の說と申さねはならぬ。成る程佛教の上には種々の說が有つて或る經には大蛇を見ることも女人を見るべからず。一度女人を見れば目の功德を失ふ抔と云ふ說も出て居





ります。是等の經文を見て其意味の如何を尋ねず只一概に婦人を惡く云ふた者の樣に思ふは大早計の至り思はさるの甚しき知らさるの極りと言つて宜しいので全く意味を講究せぬのでございます。凡そ言はと云ふ者は皆其相手とする所又目的とする所により主意が違ふ者でありますから故に其中に色々意味のある事を知らねはなりませぬ。婦人を大蛇の如く云ひ婦人を見るな近くなと云ひたるは是は一類の或る一方の人に對し事の必要より如此畏れ愼ましめた者で。即青年の男子が修業を致して居るのに婦人の優しい姿を見て其色香の爲に心を亂すと云ふ事がある。然ふ云ふ間違ひの出來易い場合に之を防禦制戒の爲めに如此云ふたので。是は相手と目的とに依て殊に此う申したので。惣じての男子に向つて婦人の事をかく畏るべきものと云ふたのでなく。或る佛道修行して居る青年の僧侶に向つて禁戒し

た詞であります。彼の比叡山高野山抔女人結戒を致したのは皆然う云ふ譯から起つたので。若い出家が修養せられて居る所に婦人が參詣する爲に失體墮落する事があるので女人結戒と云ふ事を致されたのであります。只然ふ云ふ點で男子の修業を墮落させぬ爲め一方を烈くし言ふて近づかせぬやうにした詞である。是れが婦人を畏るべき者と云ふた譯で。若し或は女學の尼抔に對した時は男子は見るべからずと誡しむる事でありませう。又今一つ女は佛道の器に非すと云ふ說があります。是は前の說とは大に違つて婦人の性質は柔輭果斷に乏しい所から。すべて女と云ふ語を柔弱なる方面に使用した詞てある。是は剛柔の二德を男女に分つて剛の强い方は男の受持ち柔の弱い方は婦人の受持から致す譯合て。自然物に耐へて充分仕遂けると云ふ方を男子とし又迚も我等には及ばずと惰弱の心を懷ひて居る方を女子とした詞てある。現に世間ても物を充分仕遂げるを「男」と云ふ詞を以て言ひ表はし。又物に執着して判斷力なきものには「女々しい」抔と云ふ詞を使ひます。是は男女と云ふが形の事てはない心の勇怯を形容した詞てあります。假令へは或る下婢に向つて其方はあの漬物桶の重い石を擧けることが出來るかと云へは。下婢は答へて大丈夫屹度擧けますと答へませう。所が大丈夫は卽大なる男マスヲヲと云ふ詞てある。然れは自分は女乍ら立所に此大石を擧ける力があると云ふ事を大丈夫と云ふ詞を以て表はして居ります又彼方のお孃さんは御丈夫に御成長抔と申すも同樣て只健康壯寧なるを丈夫と云ふ詞を以て祝します。丈夫は男子と云ふ事なれは男卽丈夫と云ふ詞が武々しい健康の事とも成り。或は物を仕遂けると云ふ詞ともなる如く物事に耐へない事を女と云ふ詞を以て表はして居

ります。女は佛道の器に非ずといふは奮發心のなき惰弱者を貶斥した語て。形の男女の事てはない假令形は女にても充分恐耐して業に堪へ行を遂る者を佛教ては男子といひます。

彼の舍利弗と天女と問答を致したといふ事が維摩經の中に說てあります。天女と舍利弗と問答を致す前に舍利弗は他の菩薩の如く高座に上がらんと致しても昇れません。舍利弗の衣又天女が供養した花が舍利弗の衣に引附て落ちません。甚だ赤面致しました。其時舍利弗は花が不如法であると申したれば天女が花よりは御身が不如法でないかと難結し。夫より種々問答の末舍利弗は菩々天女に言ひ込められて後に舍利弗が御前樣は女に不似合な辨舌があると驚いて申したれば。天女は曰くイヤ私は女ではない貴方が却て女であると又候天女から遣り込められた。夫から舍利弗が氣が付て見れば今迄天女と思ふた女は却て男子に成て居り。自分を見れば却て女と成つて居つたと。斯う云ふ事が維摩經の中に書いてあります。今迄天女と思ふたが男の坊さんに成り。自分は却て櫛笄をさしたる女と成つて居ると云ふ樣に見へるが是は形の事ではない心相の反對して居る事を形容した說であります。成程舍利弗は小乘根性である故。形は男でも心が女である。天女は形は女でも大乘利根の菩薩であるから心は男である。然れば女人は佛道の器に非ずと云ふは形の女の事ではない。佛道を行する善根心のなき者を心より貶斥して女子と稱して女人は佛道の器に非ずと申したのであります。佛教で女人を佛道の器に非ずと云ふたは御婦人方の事ではない形は男子でも心に奮發のない惰弱なる者の事である。それは今の維摩經の說計りでなく諸經に數多の證據が有て。既に法華經では八歲の少女が（沙竭羅龍王の女）

現身に成佛した事が說いてある。又觀無量壽經では韋提希夫人が現身得益の事が說てある。或は勝曼夫なり月上女なり無垢施女なり玉耶女抔と云ふ婦人が開悟得益の事は枚擧に遑あらぬ程澤山あります

これが若し女が佛道の器でない物なれば婦人として如此の利益は得られぬ筈である。然れば女人は佛道の器に非ずと云ふは體格の女の事ではなくて心の墮弱なる奮發心のなき者の事を云ふた事は分明でありましょう。近くば奧村五百子女史の如きは佛教では之を立派の男子丈夫と申します。彌陀佛の本願に「變成男子」と申す事のあるのも其義で。我が眞宗では殊に女子を教の正客として本山にて歸敬式を行ふ時にても男子よりは女子を先にして丁重に取扱ふ事で。決して婦人を輕侮蹂略にする事はありませぬ。（中　外）



## 吾人の信仰的生活法

（高輪佛教中學に於ひて）

文學博士　村上專精師　演說

信仰的生活法とは。吾々の心の中に充分な安心が出來て吾人の生存中充分に活動するの謂である。何れの宗教といへども宗教の教ゆるところは皆信仰的生活法ならざるはなしである。釋尊の教へたまふ所も基督や孔子の說かれし道も全く此外に出づることはない。卽ち人々の精神上に一つの信念。おちつき。きまりが定まりて天地間何人も動かすことの出來ない確乎不拔のものがあつて。そうして世の中に活動すると云ふことである。これを淨土眞宗にては信行と云ふてある。信とは金剛心であつて何人も動かすことの出來ないものである然し信には行が伴はねばならぬ。若しも信のみあつて行かなければ何等の活動もない死人と同じことである。信には必らず行の活

動を伴はねばならぬ。啻に眞宗のみならず佛教全體が概括してしまへば信行の二つである。一代藏經廣しと雖も歸するところは信行の二つである。信とは。おちつき行とは。はたらきのことで何れの宗派も悉くこの二つに攝まつてしまう。丁度。世界の人口は十四億あるも悉く男女の二つを出てないと同じことである。佛教の法門無量なるも概括すれば信と行。信とは吾人の精神上に確乎不拔動かしがたき信念を有することで。行とは其信が吾人の全身全體卽ち耳目口手足の總てに實現せらるゝものである。然るに信とは南無阿彌陀佛でなければならぬとか。南無妙法蓮華經に限ると云ふて狹いところに拘泥しておるから喧嘩が起る。それでは眞正の活動と云ものがない本堂の中で珠數を繰つて御念佛を稱へるとか。木魚を叩ひて御題目を稱へるとか云ふ樣なことばかりでは實に狹いつまらないことである。それもあながち惡い事ではありませぬぞ結構なことには違ひないが佛教の眞意を得たる者ではない。それ故に私の信仰的生活法が云ふ題の下に御話をいたすことは。自巳の精神上に信ずるところと云ふてよいか。考へたること云ふてよいか。つまり飾りなき決心を云ふのであつて。この事を公會の席で御談するのはこれが始めである。この後も私はこの決心を以て進みたい考へである。然し其御談は小學校の生徒でも能く知つておる樣な極めて平凡なことで。唯私が平凡なことをば自分で組立てゞみただけのことである。

支那の白樂天と云ふ名高い詩人が。鳥窠禪師の許に至り佛法の大意如何と尋ねたら。禪師は諸惡莫作衆善奉行と答へたると白樂天が左樣なことは三歳の童子もこれを知つておると云ふ言の下に。禪師は三歳の童子これを知ると雖も八十の老翁もこれを行ふことは難い

と答へられた。宗教上の御話は學問上のことゝは違ふて能く知ておることを幾度も〳〵聞かねばならぬ學問上のことなら數學なら數學化學なら化學。昨日聞て知ておることを。今日再び聞くには及ばない。然し宗教上の御話。卽ち吾々の精神の實行にかゝわることは幾度も幾度も命ある間は聞ねばならぬ。蓮如上人が「そのまゝうちすて候へば信心もうせ候べし細々に信心のみぞをさらへて彌陀の法水をそゝげといへることありげに候」と仰せられたのは此事に外ならぬのである理屈にかゝわることは一度でよろしいが實行にかゝわることは十度聞ても足りない。何事でも實行は大變六ケしいから行ひ難いことを行ふには方法を要するのである此方法に就ての古人の實例は澤山にある釋尊が尸迦羅越に對して教へられた六方禮經の如きも一種の方法に過ぎない。フランクリンも毎日十三ケ條の事柄を定めて置て實行したと云ふことである。又た孔子の弟子の曾子と云ふ人は日に三度我身を省みたと云ふてある毎日々々我身の行爲に反省注意するは確かに善き方法と云はねばならぬ。善導大師は六時禮拜と云ふて毎日六遍づゝ禮拜勤行をなされた。それが暑され　朝暮二時。二時も大儀だから朝一遍でおかうと云ふ樣なことになつてはすまぬ。然し方法と云ふものを單に儀式形式に止めて置てはならぬ。尸迦羅越に教へられた六方禮經の釋尊の說法は身儀の禮拜の外に精神の禮拜を教られたのである。斯くの如く實行方法としての古人の例は澤山にあつて何れも皆結構ではありまするが。こゝに私は古人の例に參照して今日の如き多忙な世界にも普通一般に行ひ得らるべき實行方法をば左の五ケ條と定めましたのである。

一。處世の爲め一日も怠るべからざるものは自巳の攝生なり

二。獨立の爲め一日も忘るべからざるものは自治の精神なり
三。修身の爲め一日も欠くべからざるものは廉耻と忍耐なり
四。人道の爲め一日も離るべからざるものは宗教の觀念なり
五。公共の爲め一日も忽かにすべからざるものは個人の職務なり

諸君極めて虛心平氣にこの五ヶ條を御考へ下さい。今日普通一般に亘りて如何なる人でもこの五ヶ條は是非とも守らねばならぬことであつて。又誰でも實行の出來ぬと云ことはあるまい。此五ヶ條に注意して行けば人として實に立派な人であつて自分にはこれを守りて行くつもりですから。これから一ヶ條づゝ順次御話を進めてもきませう。

第一條は。衛生に注意することである。此事は判りきつたことであるけれどもこれほど實行に困難なることはない醫者の不養生。坊主の不行狀と云ふて。醫者は衛生のことを能く知ておりながらなかなか其實行が出來ない。吾々の最も困難なることは衛生と道德である百人が百人ながら能く知ておることを行ふことが出來ない一寸考へてみても。生きて居たいか。死にたいかと云へば。誰でも息災延命を願はぬ者はない。よく御寺へ參るお婆さんなどが。こんなつまらぬ婆婆に何時迄も長らへておらふよりかは一日も早く御淨土參りかしたいと云ふことを聞くが。嘘の皮である。眞宗の信者が御淨土參りを急ぐのは大に誤ておると云はねばならぬ眞宗の信者たる以上は少しは親鸞聖人のまねをするがよい。親鸞聖人のまねが出來ずば蓮如上人のまねをするがよい。それも出來ぬならば法然上人のまねでもよい。親鸞聖人も何歳迄生きられたか。九十歳である。蓮如上人は八十五歳である。モーそれで澤山なか〳〵八十五。九十迄生き

られるものではない。眞宗の信者は其宗の御開山を見るがよい。娑婆は苦の世界である極樂は結構な淨土であるから。信心決定して極樂往生を願へと教へて下された祖師方が皆長壽である。親鸞聖人蓮如上人法然上人皆長壽である。それは彌陀如來の化身であるからと云へば致方がない。彌陀の化身たる以上は早く死んでみせそうなものである。眞宗の僧侶も信者も皆祖師方のまねをするのがよい。衛生に注意して長壽をせねばならぬ。よく考がへて御覽なさい。此身體があれば念佛申すことも御經を讀むことも御本山の御世話をすることも何も出來ないことはありませぬが。身體なしには何事も出來ない。木造も煉瓦造も地形を造らずに於てはどんな家も建つることは出來ない精神上肉體上何事によらず身體なしに出來ることかあれば御目にかゝらぬ。それでも御信心は別物ぢやと云ふかは知らねで



病床に呻吟して苦しい息をついておる樣では御信心を頂くことも難しいことはありませぬか。人間として第一着に注意すべきは衛生法である。殊に青年の人に注意を願ひたい青年時代中學時代が體格の壞し盛りである。なる程學校の課業として儀式的に體操はしておる其他の運動もする。然しそろ〳〵酒の味を覺へて酒に耽る。それも我飲と云ふことをする。又近頃は卷煙草を吸ふ。まだろくろくに身體も伸びぬ中に鼻から煙をふかしておる。私共の若ひ時分とは違ふて卷煙草と云ふ樣な便利なものがあるから皆が早くから煙草を吸ひ初める。これがいけない。此外に近頃は茶話會などで菓子の食ひ合をすることもある。この樣なことは衛生上至極惡いことである暴飲暴食をして胃腸に食物を停滯せしむる度に身體を少しづゝ壞してゆく。毎日少しづゝ破損することは目に見えぬとも一年には三百六十

回十年には三千六百五十回身體を破損することになる。それで身體がもてますか。まだ此外に青年時代に非常に身體を壞すことがあるが。席が汚れるからこゝでは云ふまい。

凡そ人間と生れた以上は何か仕事をせねばならぬ。中學校に學ふことの出來る人は普通一般の人とは違ふておる廣い世の中には小學校にも入ることの出來ぬ者が澤山ある。花の都にもこうゐう不幸な人は澤山にある。諸君は大抵田舍に生れた方であらふが。田舍に生れながらも既に中學校に入ておる。今日まで何等の仕事もせずに國家の資生を費しておるではないか。此まゝで仕事をせずに終てはすまない。將來大に仕事をせねばならぬ苟くも宗教家として日本人として將來に大希望を持てたらるゝ諸君にして大切な身體を壞す樣なことが出來ませうか。誰れそれは病人であつてあれ程の仕事をした



と云ふはよく聞きますが。若しも其等の人にして健全な身を持ておつたならば更に勝れた仕事を成したに相違ない。法律家であらうが官吏であらうが。教育家乃至實業家。總ての職業に通じ階級に渡りて。人間としては一日も衛生法を怠てはなりませぬ衛生法に就ては一々説明する迄もありませぬが。まづ清潔と運動と食事との三者によく注意して守るところあればよろしいでせう。

第二條は獨立心の重んずべきことである。日本人は西洋人に比して獨立心が少ない。日本人の中でも殊に坊さん程獨立心のない者はない。もたれて〳〵もたれきつておる。然し獨立と云ふことも取り樣によりては弊害もあるが天地間の萬物皆獨立して㋐くのが當り前である一莖の草木でも空氣を呼吸し養分を吸取して生きておるではないか。御互人間では手あり。足あり。耳あり目あり。口あり鼻あ

り。其他總ての機關が揃ふてあるから働けば獨りで飯の食べる樣に身體がチヤント與へられておる。それども。盲とか啞とか云ふ樣な不具者は致方もないが。盲でも啞でも今日は盲啞學校で教へられて夫々獨立する考でやつておる。吾々の身體は天から與へられたか。神によりて造られたか。又は前世の因緣より作られたか。それは兎に角。一生涯獨立し居る樣に出來ておる。人にもたれる。人に倚賴するは極めて誤ておる。若しも人に依賴して間違はねばよいが多くの場合に於て依賴心は駄目である。危險至極である。親にもたれて居ても一朝にして親が亡くなれば忽ち迷はねばならぬ。子に依賴する。子が死ねばドーすることも出來なくなる。依賴しておる間はよけれども依賴することの出來なくなる場合を考へねばならぬ。これが此世の中では無限の力を有する者のなき故である。親の慈悲は深く且つ大なれどもその慈悲を施すの力に於て限りがあるから絶對的にこれに依賴することは出來ない岩崎でも三井でも其財產に限りがあるから。世界の貧困者を悉く救ふことは出來ぬ。有限なる者には絶對的に依賴しても駄目であるそれ故に吾人は須らく人間以上の者に對して信賴すべき筈である。人間以上の者とは宗教上の御本尊である。眞宗にては阿彌陀如來である。大木に纏ふてある蔦は風の爲に大木の吹倒さるゝ場合にともに倒れねばならぬ。人間世界には一こして吾人の依賴するに足るべき者のなき以上は吾人はこの世に於ては飽迄も獨立心を養はねばならぬ。然し或程度までは依賴せねばならぬ。中學校に在る諸君の如きは現に親兄弟に依賴しておらるるのであるが。一定の時期を經過した後は獨立してその恩返しをせねばならぬ。私は獨立心のなき人は大嫌ひである。獨立心とは自治の

精神である。今人を古人に比較してみるに。今人は隨分氣儘である僧侶にしても禪僧或は律僧の如き。又は眞宗などでも昔は師弟の間柄の如きは養程嚴肅なものであつた。それに今の人は若い時より氣儘に育つから自分で何事を爲すのも嫌になる直に人を使ひたがる。自分で出來ることをば人を使ふてなさしめるのは自然の理に背くものと云はねばならぬこの手あり。以て用を辨ずるに足る。この足あり。以て歩行するに足るではありませぬか。昔は瀛車がなかつた。人力車がなかつた。今は瀛車もあり人力車もある。大臣も學生も一等か三等の違ひこそあれ同じ瀛車で旅行しておる。瀛車の通せざる所は人力車に乗るが當り前になつておる。斯く云へばとて强ち瀛車や人力車に乗ることを止めるのでもないが兎に角。自分の事は自分でやると云ふ習慣が大切であるこの間も或人から山本海軍大臣の



ことに就て種々感心すべき話を聞きました中に。或人の云ふには。彼人は毎朝自分の床臥を自分で片つける。決して人を使はない。皆さんも其位のことは已れもやつておると云はれるかも知れんが。兎に角一國の海軍大臣として而も年齢五十以上にも達しておらるゝ人としては。中々出來ないことであらふと思ふ。何でもないことの樣だが考へてみると。その何でもないことが容易に出來ないものである。こう云ふ習慣は大に勉めて養はねばならぬ又加藤弘之と云ふ人に付ても聞たことがある。彼人は文學博士法學博士であつて年齢は七十に近い。餘程老衰しておらるゝから一寸見た所では八十以上とも見へる。彼人の如き地位にあり且つ老境にありながら一日と雖も自分の書齋を決して人に掃除させない。こゝである。この習慣が大切である。諸君須らく自治と云ふことを考へたまへ。自分のことは

自分でする。これが自治の精神である。斯く云へば諸君の中に或は書齋の掃除位は自分でやつておるが。毎日も面倒だから三日に一邊それはいかない。總て自分で出來ることは決して人を使はない。自分でする。此習慣は個人として國民として獨立自治の精神を强くする上に極めて必要なことである人は決して依賴心を持てはならぬ。第三條は身を修むる上に付て廉耻と忍耐とが極めて必要であると云ふ事。この事柄もよく判つておれども實行はなか〳〵困難である。吾々が今日身を修むる上に付て。學藝技術に通達する點に於て耻廉と忍耐とは大必要なものである。身を修むると云ふことも。學藝に通ずると云ふことも。容易なことではない。然かし廉耻と忍耐との二者を守てゐけば恐らく成し得ざる事はなからふ。廉耻とは佛教に所謂慚愧である耻づる心である。人より馬鹿と云はれやうが。何と





云はれやうが。耻づることなく。何ともないと云ふ樣なことで。人として體面を保つてゐくことは出來ぬ。孟子に「耻の人に於けるや大なり。これを得れば聖賢なり。これを失へば禽獸なり」と云ふてある。人をして聖たらしむるは耻づる心があるからである。禽獸たらしむるは耻づる心を失ふからである。遺教經にも「慚愧の心ある者を名けて人とす。慚愧の心なき者は飛禽走獸に等しと」說かれてある。飛禽走獸とは飛ふ鳥走る獸と云ふことで。人にして慚愧心なければ鳥獸の仲間入りをしておる者と云はねばならぬ。耻づる心があるから忍耐も出來る。堪忍も出來る。佛教では忍耐のことを忍辱と云ふてある諸君考へて御覽なさい。忍耐なくして成就し得らるゝことは世の中に何事もない。吾々人間の成さねばならぬことは何れも皆困難な仕事である。この困難に打勝てゐくのが忍耐である。菩

薩六度の行の中にも忍辱と云ふて忍耐が加へられてあるではないか阿彌陀如來は忍力成就して衆苦を計せずと說かれてある。この忍耐の反面は我儘氣儘である。我儘氣儘はろくなものではない。我儘氣儘にして人に好かるゝことはない。世の中に墮落する人と云へば必らず廉耻と忍耐とを欠ておる人である。よく世間で聞くことであるが。あの人はドーモ勝れた人であると云へば直に辛抱强いでなー。忍耐家ちやでなー。世の中の總ての階級卽ち個人々々の財產智識品性等に就て多くの階級の生ずるのは皆この廉耻と忍耐との結果である。廉耻忍耐が一段進めば其人の地位も一段進む。廉耻忍耐が二段進めば其人の價値も二段進むのであつて。若しこれに反して耻廉忍耐が減ずれば減ずる程。其人の價値は減ずるのである。廉耻忍耐が減じて終にこれを有せざるに至れば其人は地獄の底まで墮落したものと云はねばならぬ。

世界に於て廉耻忍耐のない者は何處にありやと一考するに人類中には乳呑兒である。乳呑兒は耻もなければ禮義もない。御座敷の中で大用小用隨意。耻がないと共に辛抱することが出來ぬ。今五分間待てくれゝばよいに。それが。出來ぬ五分間の辛抱が出來ない。少しも慚愧の心がないと共に忍耐心がない。小兒の外に狂人が此仲間である。巢鴨の癲狂院に澤山居るが彼等は決して耻づる心なく。耐忍することがない。全く小兒と同じことである。看護人の迷惑をも顧みず我儘氣儒をやつておる。小兒と狂人の外に此種に屬する人は大病人である。病氣の爲に苦しめられて辛抱するにも辛抱の出來ないのであるから。これは致方もない。諸君。小兒や狂人のまねが出來ますか。吾々は苟くも小兒に非ず狂人に非ざる以上は耻を耻とし

て辛抱せねばなるまい。實に廉耻と恐耐とは人としての價値を定める物柄である。辛らいことがあつて。今日一日は辛抱してやる。耻かしいからこうゐうことは出來ない。此心掛が一日々々と積りて〳〵十年の後にもなれば。非常なものである。これを守ると守らざるとの差異は實に驚くばかりである。十年立てば一昔。其間に顯はる等差階級は何物かこれをなすかと云へば廉耻と恐耐との結果である昨日も眠たかつたが朝起きして學校へ出席した。今日も雨が降るのに登校は大儀であれど。學校出席は學生の職務であるから致方がない。毎日々々の豫習温習は云ふまでもなきことこれを恐耐して爲さねば學生としての面目が立たぬと思ふて自から反省し自から耻ぢて勉强すれば一日に一字づゝ覺へても一年に三百六十字。十年には三千六百五十字若し支那文字で三千字以上を能く知て居れば漢學の



大先生と云はれるに相違ない。啻に文字を學ふことのみならず。世上の藝術皆この通りの恐耐を以て進みゐかば。恐らく其途にかけての達人と仰がるゝに至るであらふ。品性の修養に於ても此心掛がなくてはならぬ。塵も積れば山と成ることは何れの方面にても同じことである。殊に青年諸君は前途實に有望である。吾々の如きに至てはこれ程奮勵してももはや先きが間へておる諸君は須らく自重して將來の希望を達せねばならぬ。

第四條には人としては宗教の觀念が極めて大切である宗教とか倫理とか云ふことに付ては六ヶ敷議論もありまするが。左樣なことはまづ知らずとも。人は是非とも宗教の觀念を養ふて已れが行爲を律してゐかねばならぬ筈である。何故なれば。人間の惡事と云ふものは多くは人の見ざる間に於て行はれておる。强盜の如きも夜分に行は

れる。白晝に强盜と云ふことは至て少ない。總ての惡事は暗中に行はるゝのであるから。吾行爲の監督者として吾々は宗教の信念を要するのである人道は百般無量なりと雖も心中に宗教的觀念のある上は進んでこれを履行するの勇氣を生ずるのである。宗教の觀念とは其宗々の本尊を崇拜しておることを云ふので基督教でも佛教でも儒教でも又は因果の理法でも其他何でも一つ吾々の心の中に本尊をつかまへておれば。自然と吾人の行爲を修めて惡くことが出來るに相違ない。近頃。宗教と倫理との議論か隨分喧しい樣であるが。要するに人間の心は暗の中にて惡を爲し易いのであるから。自已のみでは人道を實行することも中々困難である。然し吾信ずるところの本尊と云ふものがあれば。實踐道德の上に偉大なる力を覺るのである。





第五條は個人々々の職務を勉勵せねばならぬことである人間として無職の者は世界中になき筈である。何か一定の職務と云ふものが人には必ず備つておる。公然政府に屆けずとも人には各職務を持ておる。若しも一定の職務なき人間なれば世の中に生存することの出來ない筈である。鷄は卵を産む犬は盜賊の番をする。猫は鼠を捕るこれは皆受持の職務である。この職務を守てさへおればそれでよい。盜賊の來た時に猫はニヤーンとやつておつても差支がないが。犬は忽ち吠へてこれを退けねばならぬ。又犬も其通りで鼠は捕らなくてもよい。其他飯を炊く爲に使はれておる下女の如きは私は御飯を炊くことを知りませぬと云ふておるなら。それこそ無責任な話である無責任とは何も桂さんに限つた譯ぢやない。天地間の萬事萬物皆夫々の職責を持ておる以上は。其職責を盡くしてこそ人より大切にせ

らるゝのである。植物の如きもこの通りで。雜草はよく生へて困るか。何も役に立たないものであるから又草が生へたと云ふて大變に迷惑する。然し奇麗な花を咲く植物は人が肥料を與へて愛育してくれる。米麥等は農夫によりて非常に大切にせらるゝのは皆其用を爲すからであります。且つ吾々は毎日々々三度の食事を要するからには其代りに自分々々の職掌を盡くさねばならぬ。病氣の時には飯を食はないが藥を飲でおる斯くの如く吾々の生存中日々要求するものに對しての報酬として〻も自巳の職掌を忽かにしてはならぬ。丁度旅行をして旅館に泊つておると同しことである。一日宿すれば一日の拂ひ。三日宿すれば三日の拂ひをせねばならぬ。吾々の職務を勉むるのは社會に對して拂ひをしてゐるのである。鷄は鷄。犬は犬。猫は猫としての職務を盡くすと同じく自分持前の仕事をすればそれ





でよろしい。あながち金を儲けて振まかずともよい。宗教家は宗教家として實業家は實業家として官吏は官吏として。乃至學生は學生として自巳の務めを怠つてはならぬ。寒いとか暑いとか身體が疲れたとか何とかかとか云ふて職務を怠たる樣なことがあれば。實に個人として國民として社會の一員として誠に相濟まぬ次第であると思はねばならぬ。耳は耳。手は手足は足として各自分擔の職務がある と同じく。個人は個人としての職務に忠實なることによつて國家を益し社會を利することも出來る。例令直接ならずとも間接には廣く一般公衆の利福を增すことになるのであるから御互は常に反省し常に慚愧し常に恐耐して大に勉めねばならぬ。これが卽ち佛教に所謂自利々他圓滿である。以上の五ケ條を以て私の信仰的生活法と致しておるのですから。諸君と共に此決心を以て世に處したい次第であ

ります。

## 武の七德と佛語との比較

（應慶義塾の演說會に於て）

文學博士　南條文雄師　演說

先づ武の七德と佛語とを比較しますと。この樣である。

夫文止戈爲武々有七德

| | | | |
|---|---|---|---|
| 一 | 禁暴 | 一 | 佛所遊履國邑丘聚靡不蒙化 |
| 二 | 戢兵 | 六 | 兵戈無用 |
| 三 | 保大 | 三 | 日月清明 |
| 四 | 定功 | 七 | 崇德興仁務修禮讓 |
| 五 | 安民 | 六 | 民安 |
| 六 | 和衆 | 二 | 天下和順 |
| 七 | 豐財 | 四 | 風雨以時災厲不起國豐 |



是だけに付て少しお話したいと思ひ升。武の七德卽ち禁暴。戢兵。保大。定功。安民。和衆。豐財と云ふのは。春秋左氏傳にある詞で隨分古いものです。春秋左氏傳は三卷あつて。卽ち支那の周の世二百四十二年の間の事を記した書物で。其第十一卷目の魯の宣公卽位十二年目の下に見はれて居る。鄭と云ふ小さい國があつて。楚の國の盟に背いた。それで楚が鄭を伐つた所が鄭の隣に晉と云ふ大國がある。是が鄭を救はうと云ふので戰爭が始つた。是は春秋の經文に

『夏六月乙卯晉荀林父帥師及楚子戰于邲晉師敗績』とあり楚の君は。春秋の五覇卽五人の大名頭の五人目の人で。五覇と謂ふのは。齊の桓公。晉の文公。秦の穆公。宋の襄公それから楚の莊王である晉が鄭の加勢に出て來たのですが。それでも楚が勝つた。其時に楚の家來藩黨と云ふ者が。此度の戰爭非常に御勝利であつたに就いて

は。何か大きなものを拵へて。後世へお遺しになつたら宜からうと申立てた。其時の楚の莊王が謂はれた言葉は。隨分長い詞でありますが。其中の要點だけを茲に擧げてあります。夫文止戈爲武々有七德と云ふので武の七德とは。ズツト後にある詞で。それを只寄せて書いて見た。流石は文那人だ。文字の作り方は旨い。夫文とは。卽ち文字の事であるが。戰爭に勝つのは武が强いのである。文武の二つでは。武の德が顯はれたのである。所が其武の字の作り方を見よ戈を止むるを武とすとある。今では誰も知る通りの字になつて居ますが。武と云ふ字の古い字は。干戈の戈の字の下へ止と云ふ字を書いた。それで——戈を止めると云ふのが武の字である。斯う云ふことを先づ楚の莊王が話して。詩經抔から色々引きまして。さうして七の德は。上の列に書いてある通り一より七まであると云はれた



歷史は繰返すものと常に聞て居りますが。勿論昨年以來の戰爭は。我國歷史ありて以來の大事件である。十年前。卽ち明治二十八年五月。遼東半島をお還しになる時の。詔勅の中に

朕ハ我武維レ揚リテ汝等ト其譽ヲ偕ニスルヲ樂ムト雖邦家ノ前程ハ尙遼遠ナリ

と仰せられた。尤も終りに

一誠以テ他日ノ報効ヲ期セヨ

とある。あの詔勅を拜讀いたして以來。二十八年。九年。三十年頃迄私實は餘程この武の七德の話をしました。其後に段々さう云ふ話は止めて居た。然るに三十八年十月十六日の日付を以て御詔勅が出ました。其れをも御免蒙つて。此武の七德と對照してみたいと思ひ升。第一の暴を禁ずると云ふことは。暴は道に外れたことである。

さう云ふ事をさせておいては。世の中の平和は保てないと云ので左樣な暴行を致しては。善くなからうと屢々御照會があつたけれども六個月を經る間。收まりが着かなかつた。終に昨年二月十日を以て千戈に訴へなければならぬと云ふ事になりました。然るに連戰連勝の結果。敵の方で。是までの事は暴であつた。もう以後は左樣なことは致さないと斯ふ云ふ風になつて參りましたから。講和が成立つたであらうと思ひます。乃ち暴を禁ずるのが第一の武の德である。第一の武德が顯はれたに就いて。第二に兵を戢める。此戢めると云ふ字は。普通に用ゐる收の字と同じで。音もシウである。卽ち海軍の方は先達以來戰旋した。陸軍も續々凱旋する。是は卽ち續々兵を戢めると云ふ場合である。敵が。是れまでのやうに暴行は致さぬとなつたから。暴を禁じて兵を戢めると云ふのである。此外にまた五



つは我國人固有の性質です。私共が專門で申しますと性德と修德。卽ち性質の德と。修養の德とを云ひます。性質が良くても。修養を加へなければ立派になりませぬ。小供が生れて天性非常な鋭敏であつても。學校に入れなかつたら。詰り鋭敏でなく成つて仕舞ふ。それ〴〵と段々と修養を加へますと。一人前の者もある者がと。人を驚かす程。一人前以上に成らぬとも限らぬ。それでありますから。我邦の性德と云ふものは無論ある。陛下が御參拜になりました。天照大神のお言葉の中に。天壤無窮と云ふことがある。卽ち我邦の皇運は天地と共に窮りないと云ふ御性質の德がある。ですから武の七德なご。支那人の詞を借りて來て。彼是云ふことはないですけれども。天壤無窮の皇運を扶翼せよと云ふ御命令を受けて居ります吾々が教育と云ふことを。今日の時勢に必要と感じて居る限りは。修養が最

も大切であると思ひますから。是は皆な參考のために。個樣な昔の人の云つたことを出して來たのです。

第三の大を保つと云ふことは。大日本帝國とお唱ひになつて。全地珠に向はせらるゝので。固より天壤無窮の御性質てあるから。少しも武に劣るべき所がないけれども。大を保つ。保つは卽ち保險の保の字。保證人の保の字だから。どこ〳〵迄も受け合ふので。大日本帝國の此大の字は。眼に見えただけの字でないことは無論のことである。私は幼年の時に人から一番先きに講釋を聞かされたのは。論語孟子。この孟子に。充學して光輝ある之を大といふことある。德が內に充ち實ちて居るから。隱さうとしても顯はるゝ。さうして光輝がある。是が卽ち大人。大德の人と謂はれるので。德が充ちて居れば隱れたるより顯はるゝはなし。如何にも一言一行の德が。是が卽ち大である。我國に性質大を保たせるゝと。云つて。吾々が油斷してはいかぬと同じです。

第四の功を定むるちや。是も近い所を申しますれば。昨年來手柄をした人には。その時々御賞典も在りましたが。又數多いことですから。追々論功行賞があるでせう。

第五の民を安ずる。只吾々人民を安ずるばかりでない。總て世の中を一和させる事である。

第六の衆を和するで。若し戰爭が長く續けば。只一方ばかりでない他方でどんな事が起つたかも知れぬ。斯う考へますること。衆を和すると云ふことが。全世界に亘つて居ると思ふ。

第七財を豐かにする。戰爭の費用が要らなくなつたなれば。それだけ國の財產を豐かにする次第である。

斯う云ふ次第に。莊王は旨く順序を立て七德を駢べた。十年前に邦家の前程尙ほ遼遠と仰せられたが。今日一日に七里の道を歩行かうと踏みだしたのに。未だ二里しか行かぬ。後に五里歩かなければならぬとすれば。ゆつくり休む譯にいかぬ。マア是よりここまでも殘りの道を進まなければ。今朝の目的を達することが出來ない。今日は七里の道を歩行かうと踏出したじやないかと云ふやうに。邦家の前途遼遠と云ふあの詔勅を十年前に說明しました。

次に武の七德と佛語との比較。私は佛教內の者でありますけれども御維新前。卽ち慶應年間に鄕里の大垣に居て。私が歩兵で居りまして。晝の間は鐵砲を擔いで戰爭の稽古をし。夜は藩の督學。只今の工學博士野村龍太郎君の實父で野村煥。號を藤陰と云つた先生の前へ往つてこの左傳の輪講をやつた。それから鐵砲を擔ぐことや號令を敎へられた。一人は。今遺つて居らるゝ山口の方の旅團長であつたが。出征中一級進んで第四師團長になられた大塚中將でありますが。吾々は僧兵隊でありましたが。其お蔭で。私は極く身體が弱かつたけれど。一年餘り鐵砲を擔いで歩行いた爲めに。身體が固つたと見にまして。今は中々丈夫であります。其時御維新の戰爭に出て往くことになつて一旦さう決心してゐましたが。都合に依て。又出て往くには及ばぬことになつた。左傳はこの僧兵隊時代に讀みました。所がそれと比較する佛語はそれより十年も前私が七歲の時に三部經は棒讀に讀んだ。ですから此經文は十歲以來口に付て居る。それと引合せて見るのですが。一向御參考にならぬかも知れませぬ。此語の上に一二の順が書てあるが。此順で比較して見るのです。佛と左傳を書た左丘明と約束はしないから。順は合ひませぬが。武の七德